

上京遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一五―四

上京遺跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

上 京 遺 跡

2015年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、共同住宅新築工事に伴う上京遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

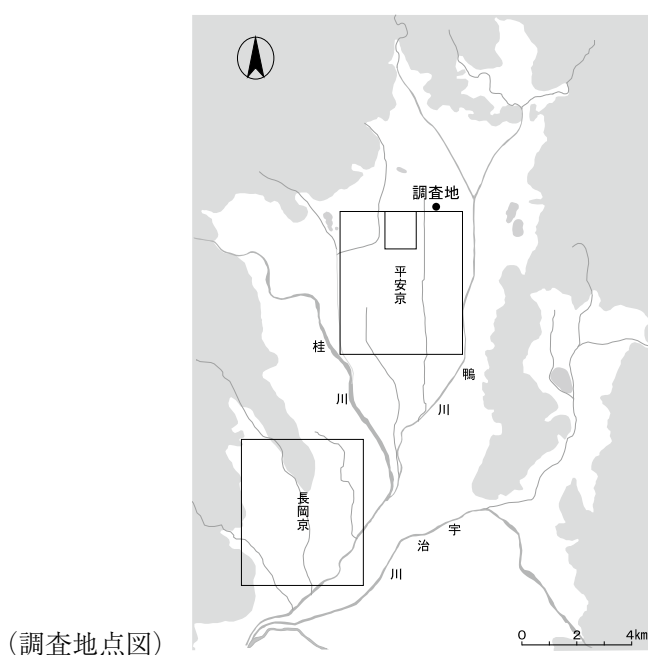
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成27年10月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 上京遺跡（文化財保護課番号 14 S 584）
- 2 調査所在地 京都市上京区武者小路通小川東入西無車小路町599、600-1ほか
- 3 委 託 者 株式会社 創生 代表取締役 長石久永
- 4 調査期間 2015年6月15日～2015年7月16日
- 5 調査面積 79.6㎡
- 6 調査担当者 中谷正和・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「船岡山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 中谷正和
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	7
(3) 第4面（室町時代中期以前）の遺構	9
(4) 第3面（室町時代中期）の遺構	13
(5) 第2面（室町時代後期）の遺構	15
(6) 第1面（安土桃山時代から江戸時代前期）の遺構	19
4. 遺 物	22
(1) 出土遺物の概要	22
(2) 室町時代中期以前の遺物	23
(3) 室町時代中期の遺物	23
(4) 室町時代後期の遺物	25
(5) 安土桃山時代から江戸時代前期の遺物	28
5. ま と め	33
(1) 遺構の変遷	33
(2) 中世後期の屋敷的空間構成について	35
(3) 近世初頭の町屋的空間構成について	36

図版目次

図版 1	遺構	1	第 1 面全景（北から）
		2	SP 7 検出状況（西から）
図版 2	遺構	1	第 2 面全景（北から）
		2	SD88 完掘状況（北西から）
図版 3	遺構	1	SD78 完掘状況（東から）
		2	SD78 完掘状況（北西から）
図版 4	遺構	1	第 3 面全景（北から）
		2	SD85 完掘状況（北西から）
図版 5	遺構	1	第 4 面全景（北から）
		2	調査区東側土坑群完掘状況（北から）
図版 6	遺物	1	SD78 下層出土土器
		2	SD78 上層出土土器
図版 7	遺物	SK74・SK65・SP 7 出土土器	

挿図目次

図 1	調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：500）	2
図 3	調査前風景（北から）	2
図 4	重機掘削状況（南東から）	2
図 5	周辺の遺跡と既往の調査地点（1：10,000）	4
図 6	調査区西壁土層断面図（1：50）	8
図 7	調査区北壁土層断面図（1：50）	9
図 8	第 4 面（室町時代中期以前）遺構平面図（1：80）	10
図 9	調査区東側土坑群実測図（1：30）	11
図 10	小穴列 SA 1・2 実測図（1：40）	12
図 11	調査区南拡張区東土層断面図（1：40）	13
図 12	第 3 面（室町時代中期）遺構平面図（1：80）	14
図 13	第 2 面（室町時代後期）遺構平面図（1：80）	16

図14	SD78南北土層断面図（1：40）	17
図15	第1面（安土桃山時代から江戸時代前期）遺構平面図（1：80）	18
図16	SP7実測図（1：20）	19
図17	小穴列SA3・4実測図（1：50）	20
図18	遺物実測図1（1：4）	24
図19	遺物実測図2（1：4）	27
図20	遺物実測図3（1：4）	29
図21	SK74出土墨書土器	30
図22	遺構変遷模式図（1：200）	34

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	22

上京遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、京都市上京区武者小路通小川東入西無車小路町599、600-1他に予定された、共同住宅の新築工事に伴う発掘調査である。調査地は京都御所の西方、武者小路通に面した場所に位置しており、『京都市遺跡地図台帳』記載の上京遺跡に該当する。当該地は住宅地として利用されてきたが、今回の民間事業者による共同住宅新築工事計画を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、安土桃山時代から室町時代にかけての遺構面が良好に確認されたため、発掘調査を実施することとなった。調査は文化財保護課の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて実施した。

(2) 調査の経過

調査区は、試掘調査の成果から遺構密度が高いと想定される開発予定地の南側の武者小路通に



図1 調査位置図 (1 : 2,500)

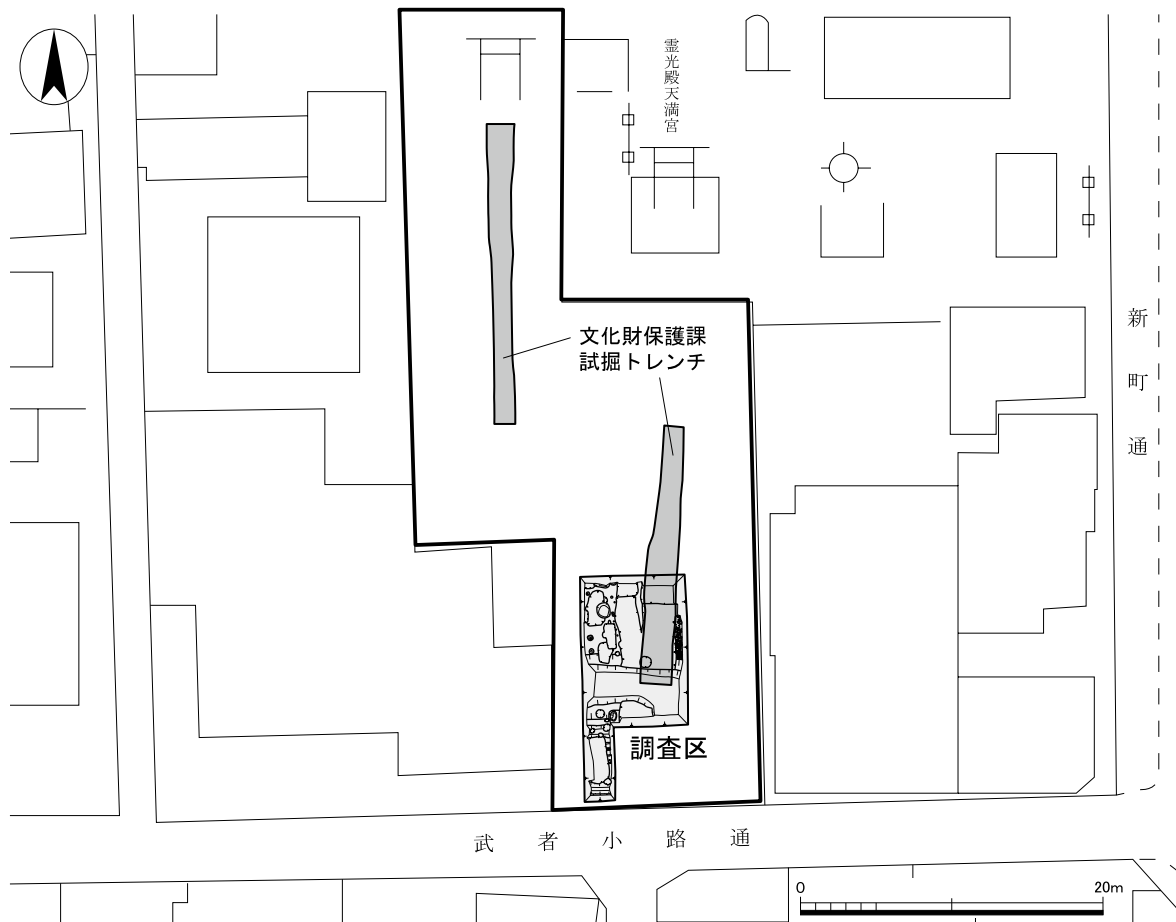


図2 調査区配置図 (1 : 500)

面した地点に、南北10m×東西7mの区画および南北4m×東西2mの拡張部を加えた面積79.6㎡の規模で設定した。2015年6月9日に原因者を含め文化財保護課と実施した現地打ち合わせをふまえて6月12日に調査区を設定し、同日文化財保護課の承認を得た。6月15日から近世初頭の遺物包含層の上面まで重機で掘削を行った後、室町時代後期・中期・中期以前(地山面)の各面までその都度人力で掘り下げ、平面図・断面図など必要な図面の作成と写真撮影による記録を行った。調査は適宜、文化財保護課の臨検をうけた。7月16日に調査を終了し、撤収した。また近隣住民からの要望を受け、希望者には調査区の見学・説明を随時行った。



図3 調査前風景 (北から)



図4 重機掘削状況 (南東から)

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地が所在する上京遺跡は、平安京造営時は京外であったが、禁裏がほぼ現在の京都御所に定まる室町時代に、幕府関連施設や公家・武家屋敷、寺院等が集中して造営されたことによって市街地化した中世の都市遺跡である。範囲は、南北が上御霊前通から一条通までの約1km、東西が相国寺（相国承天禪寺）境内から智恵光院通まで約1kmの、総面積約100haに及ぶ遺跡である。中近世の政治・文化の中心地であるのみならず、遺構の保存状態も良好であり、これからの中・近世史の研究にあたって当遺跡が果たす役割は非常に大きいことから、平成15年度に遺跡登録されることとなった。

今回の調査地が南面する武者小路通及びその周辺の歴史的環境は、後述のように至近での発掘調査例が乏しいため、文献や絵図などに依拠するところが多い。それによると、武者小路通の開通年次に関する史料が今のところ確認されておらず不明であるが、鎌倉時代中期頃から南北朝時代にかけて成立したとされる『拾芥抄』に、武者小路の名を確認できる²⁾。

南北朝時代から室町時代になると、足利満詮がこの地に居（小川殿）を構えたほか、三条西家、正親町三条家、日野家、徳大寺家などの邸宅も武者小路に面して軒を連ねたことが文献から明らかになっている³⁾。調査区の南東に位置する一条室町殿跡も、九条実経が寛元3年（1245）に造営し、後（大永年中：1521～1528）に一条家の所有となった邸宅跡である。

また、調査地周辺の様子を知る史料としては『洛中洛外図』の一群がある。当時の街並みをよく伝えるものとされる「旧町田家本」（16世紀前葉）と「上杉本」（16世紀中葉）は、当該期における上京遺跡の景観復元にあたって重要な役割を果たしてきた⁴⁾。この両絵図には、調査地がある西無車小路町には築地塀に囲まれた入母屋造檜皮葺屋根の建物が表現され、これが「常盤井殿」であったことが示されている。常盤井殿は、亀山院皇子恒明親王にはじまる常盤井宮家⁵⁾の邸宅であり、現在も常盤井図子町として町名にその名を残している。貞享3年（1686）刊行の『雍州府志』巻八によると、当時常盤井宮の邸宅と伝える地籍が3箇所あり、いずれが邸宅跡であるかわからない旨を記す⁶⁾。しかし、永禄4年（1561）の「半松齋宗養申状（三月十一日付）」に添付された「買得目録事」には、宗養が所有する不動産として「西武者小路常盤井殿御地内」との記載があることから⁷⁾、16世紀中葉にこの地が常盤井殿として認識されていたことは間違いない。

なお、同じく『洛中洛外図』（旧町田家本・上杉本）には、常盤井殿から武者小路を挟んだ南に「ほうまん寺」として瓦葺入母屋造の本堂と板葺の棟が表現されている。これが天文法華の乱（1536年）に焼亡した日蓮宗の本満寺に該当するかについては諸説あるが⁸⁾、誓願寺や革堂など多くの寺社仏閣が周辺に描写されている点と併せて注意されよう。

その後の室町時代以降の様子を伝える史料としては、寛永19年（1642）前後の洛中の地割を示した『洛中絵図 寛永後万治前』（京都大学附属図書館蔵）がある。この絵図からは、西無車小路町

地内には既に「ときわいのずし」や「せいくわんじのずし」が成立していることがわかる。旧来の街路を基本とした土地利用から街区内部にまで達する高密度の土地利用への変化を読み取ることができる⁹⁾。また、「ときわいのずし」のつきあたり（現常盤井函子町）には、『洛中洛外図』（旧町田家本）の製作に深く関与した狩野元信の邸宅が図示されている。現在に伝わる官休庵（武者小路千家）庭園^⑨や中村宗哲家住宅^⑩などと併せ、近世におけるこの地の文化的な諸相を今に伝える旧跡である。ほかにも寛文5年（1665）刊『京雀』巻第五によると、当時の西無車小路に魚屋・八百屋があったことも記されている¹⁰⁾。

（2）既往の調査

前述のように上京遺跡は登録されて日が浅い遺跡である。そのため、同志社大学今出川校地周辺の相国寺や室町殿など以前から周知され継続した調査が行われている箇所を除いては、平安京内とくらべて調査例が少ない。さらに、それ以外の調査が行われた箇所の多くが現今出川通以北およ

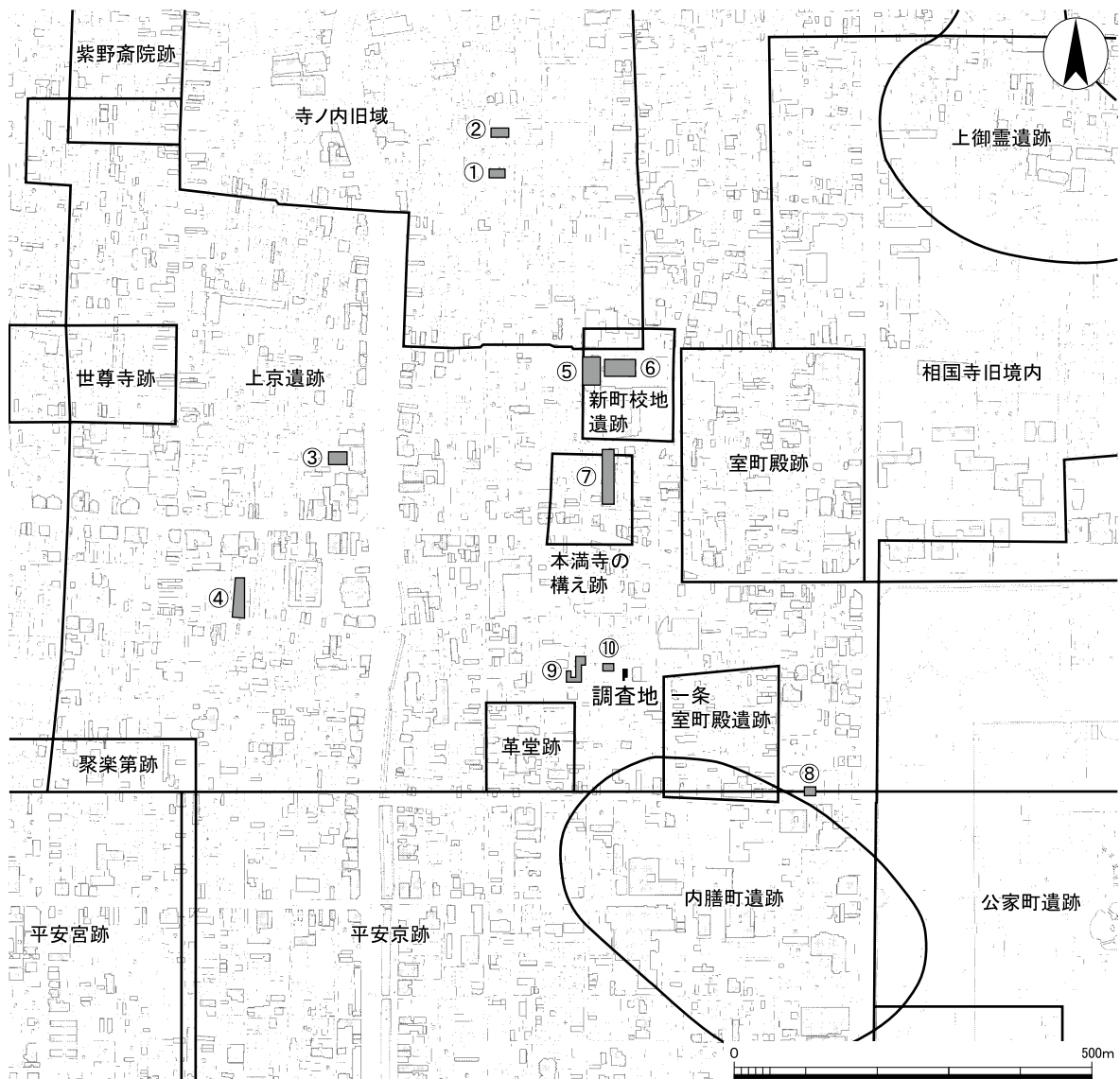


図5 周辺の遺跡と既往の調査地点（1：10,000）

び現堀川通以西に限定されている。以下、調査地近郊の代表的な事例を示す。

室町殿跡は永徳元年（1381）に足利義満が造営した、別名「花の御所」として知られる邸宅遺跡である。発掘調査が実施されており、建物跡や庭園遺構（石組・池の汀・庭石など）、築地塀の基礎と考えられる石敷きや平行する2条の東西溝などが検出された。2013年に実施された調査では、平安時代から江戸時代の遺構が確認され、室町時代の遺構も土坑や柱穴列を検出したが、室町殿跡に関する遺構は確認されていない。なお、本調査では江戸時代初頭の火災処理土坑を多数検出し、文献史料に残された元和6年（1620）の大火を考古学的に明らかにした。¹¹⁾

新町校地遺跡は『山城名勝志』にある「桜御所」として知られる近衛家の別邸跡と推測される室町時代の邸宅遺跡。石列や柱穴などの他、幅約3m、深さ約1.5mの東西溝が、長さ28mにわたって検出されており、室町時代中頃の「構（かまえ）」と推測されている¹²⁾（⑤・⑥）。

2004年の調査（①）では、室町時代の塀や井戸が検出された。これらは洛中洛外図などの史料をふまえた分析から、細川典厩家邸宅に関する遺構と推定されている¹³⁾。

2005年の調査（②）では、室町時代と江戸時代の溝・井戸などの遺構が確認された。¹⁴⁾

また2010年の調査（③）では、室町時代（16世紀中葉）と江戸時代の土坑・溝・礎石・柱穴列を検出した。¹⁵⁾

2011年の調査（④）では、平安時代から江戸時代の土坑・溝・礎石・柱穴列を検出した。このうち室町時代の溝（幅約2.2m、深さ約1.6m）からは15世紀中頃の遺物が出土しており、応仁・文明の乱前後の遺構と推定されている。¹⁶⁾

一条大路の北側に面した平安京左京北辺三坊五町の調査（⑧）では、平安京跡の調査に伴って、逆L字に屈曲する戦国時代の堀（幅約3m、深さ約2m）が検出されている。¹⁷⁾

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 2003年
- 2) 『日本歴史地名大系 第27巻 京都市の地名』平凡社 1979年
- 3) 百瀬今朝雄は、『実隆公記』から文明11年から明応9年の間の三条西実隆邸が、北は北小路（現今出川通）に面する正親町三条家の宅地の南、東も正親町三条家、南は武者小路、西は室町小路に挟まれた地に所在したと想定している。また日野邸に関しては、『実隆公記』から三条西邸から1町ほど離れた場所にあったと推定されている。
百瀬今朝雄「歴史手帳 三条西家武者小路邸の所在」『日本歴史』第690号 吉川弘文館 2005年
芳賀幸四郎『人物叢書 三条西実隆』吉川弘文館 1987年
廣木一人『室町の権力と連歌師宗祇』三弥井書店 2015年
- 4) 吉崎 伸「まとめ」『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
今谷 明『京都・一五四七年 上杉本洛中洛外図の謎を解く』平凡社 1988年
山田邦和「戦国期京都の復元」『京都市史の研究』吉川弘文館 2009年
- 5) 今谷 明「中世の親王家と宮家の創設」『歴史読本』2006年11月号 新人物往来社 2006年

- 6) 立川義彦「雍州府志 古跡門上八」『訓読 雍州府志』 臨川書店 1997年
- 7) 桑山浩然校訂「雜記」『室町幕府引付史料集成』 上巻 近藤出版社 1986年
- 8) 今谷明は『言繼卿記』や寛永『洛中絵図』にある記載から、「ほうまん寺」を日蓮宗の本満寺に比定せず、大峰寺もしくは愛宕修験関係の寺院と推定した。一方、渡辺悦子は、『洛中洛外図』にある法華16ヶ寺総本山の場所が天文法華の乱後に再建され、豊臣秀吉による大幅な寺院の移動以前の位置に描かれていることから、乱で被災した本満寺が一条小川付近に再興された可能性を指摘している。
今谷 明 註4文献
渡辺悦子「第6回 文献屋の本満寺探索 vol.2」 同志社歴史資料館ホームページ 2003年
- 9) 高橋康夫「辻子 その発生と展開 一古都における高密度生活空間の開発形態」『京都中世都市研究』 思文閣出版 1983年
- 10) 新修京都叢書刊行会「京雀」『新修 京都叢書 第1巻』 臨川書店 1967年
- 11) 尾藤徳行・小檜山一良『上京遺跡・室町殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 12) 同志社大学校地学術調査委員会『同志社大学新町校地発掘調査概報』 1974年
- 13) 吉崎 伸『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 14) 長戸満男「上京遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
- 15) 布川豊治『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 16) 小松武彦『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 17) 伊藤 潔・網 伸也「平安京左京北辺三坊五町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6)

現地表下から約0.4mまで現代から江戸時代後期の整地層(1層)、0.6mまで江戸時代中期頃の整地層(2層)が堆積する。これらの層は、瓦や漆喰などを含むほか、火災によると考えられる焼土や炭化物を多量に含む。以下、層厚0.1mの江戸時代前期から安土桃山時代の火災層(8層)、安土桃山時代の整地層(13層)、室町時代後期の整地層(41~42層)、室町時代中期の整地層(47層)が堆積している。その下には拳大の砂岩円礫を含む黄褐色もしくは褐色の風化粘土層(57層)が堆積しており、これを地山とした。

(2) 遺構の概要

検出した遺構は江戸時代前期から室町時代中期のものを主体としている¹⁸⁾。総数159基である。

第4面(地山)で室町時代中期以前の遺構を検出した。調査区東側では、東西に長径をもつ楕円形の掘り込みの底に小穴が並列する土坑群を確認した。調査区西側には土坑や小穴が分布している。

第3面(47層上面)で室町時代中期の遺構を検出した。調査区南半に区画施設として、調査区南端の現武者小路通沿いにSD82、その北にSD85を確認した。北半には土坑や小穴などが分布している。

第2面(41層上面)で室町時代後期の遺構を検出した。室町時代中期と同様の遺構配置をとり、調査区南半に溝等の区画施設、北半に土坑や小穴などが分布している。区画施設として、調査区南端の現武者小路通沿いにSD80、そのやや北にSD88確認した。またSD88の北で、幅約3m、深さ約1.5mの断面逆台形の堀(SD78)を検出している。

第1面(13層上面)で安土桃山時代から江戸時代前期の遺構を検出した。調査区南端の現武者小路通沿いにSD167を確認した。道路の側溝と想定している。また調査区西寄りに、南北方向にのびる土間状遺構を確認した。土間状遺構の周辺には、明確な並びは不明瞭であるが、礎石や柱穴がい

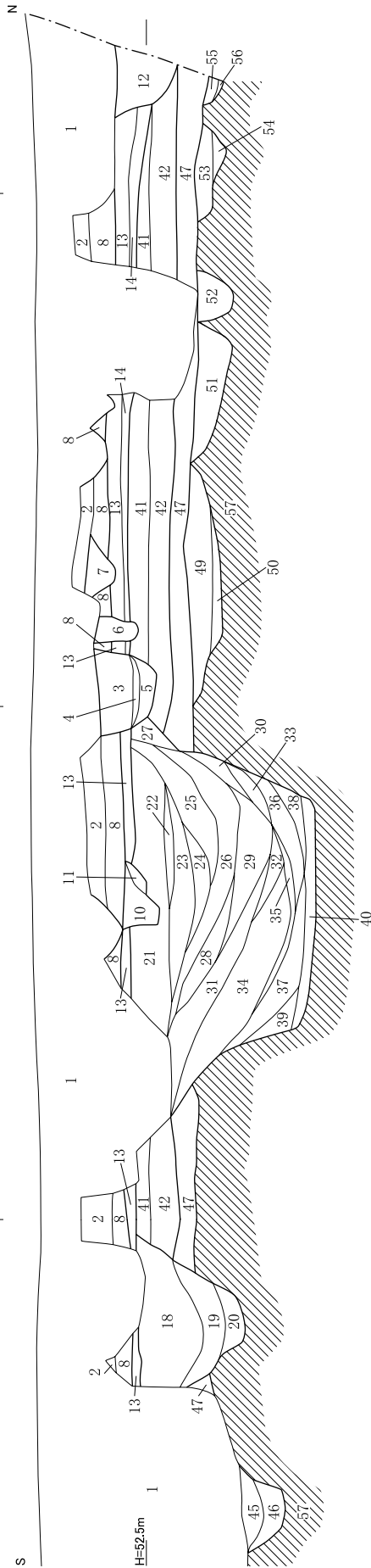
表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代中期以前	東側土坑群(SK103・104・105・114・120)、小穴列(SA1・2)	
室町時代中期	溝(SD82・85)、土坑(SK97)	
室町時代後期	溝(SD80・88)、堀(SD78)、小穴(SP66・67・72・73・79)、土坑(SK75)、土器集積(SX1)	
安土桃山時代 ~江戸時代前期	溝(SD167)、小穴列(SA3・4)、小穴(SP7・15・40)、土坑(SK4・47・65・74)、土間状遺構	

X=107.824

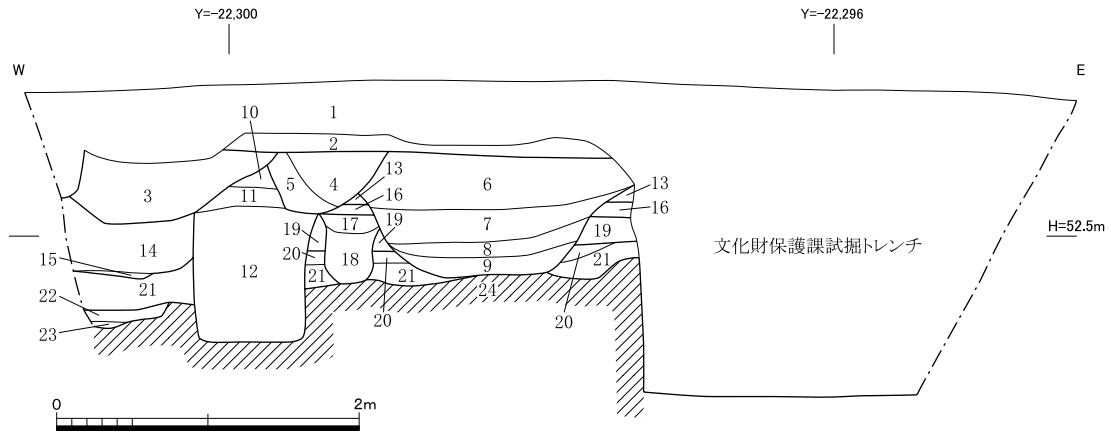
X=107.820

X=107.816



- | | | |
|---|--|--|
| <p>1 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭・棧瓦片混じる</p> <p>2 7.5YR3/3 暗褐色土 焼土・炭混じる</p> <p>3 10YR5/4 におい黄褐色土 (SP40)</p> <p>4 10YR6/6 明黄褐色粘土 (SP40)</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色土 焼土・炭混じる (SP40)</p> <p>6 7.5YR4/2 灰黄褐色細砂 焼土・炭混じる (SP45)</p> <p>7 10YR5/4 におい黄褐色土 (SP161)</p> <p>8 7.5YR4/3 褐色細砂 焼土・炭多量混じる</p> <p>9 7.5YR4/3 褐色土 焼土・炭混じる (SD167)</p> <p>10 7.5YR2/1 黒色土 焼土・炭混じる (SP160)</p> <p>11 7.5YR3/2 黒褐色土 焼土・炭多量混じる (SP160)</p> <p>12 10YR3/2 黒褐色土 焼土少量混じる (SK163)</p> <p>13 10YR5/2 灰黄褐色粘土 【第1面】</p> <p>14 10YR5/3 におい黄褐色粘土</p> <p>15 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂混じる (SD80)</p> <p>16 10YR3/2 黒褐色土 シルト混じる (SD80)</p> <p>17 10YR3/1 黒褐色土 シルト混じる (SD88)</p> <p>18 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂混じる (SD88)</p> <p>19 10YR4/2 灰黄褐色細砂 粗砂・シルト混じる (SD88)</p> <p>20 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト混じる (SD88)</p> <p>21 10YR4/3 におい黄褐色土 粗砂・焼土・炭混じる</p> <p>22 10YR4/4 褐色細砂 焼土・炭混じる</p> <p>23 10YR3/4 暗褐色細砂 シルト・φ20cm以下の円礫多量混じる</p> <p>24 10YR3/3 暗褐色土 粗砂・シルト・φ10cm以下の円礫混じる</p> | <p>25 10YR3/2 黒褐色土 粗砂・φ20cm以下の円礫混じる</p> <p>26 10YR4/2 におい黄褐色土 粗砂・シルト混じる</p> <p>27 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土・炭混じる</p> <p>28 10YR4/2 灰黄褐色細砂 粗砂・φ5cm以下の円礫多量混じる</p> <p>29 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂・φ15cm以下の円礫多量混じる</p> <p>30 10YR3/2 黒褐色土 粗砂混じる</p> <p>31 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト・土器細片混じる</p> <p>32 10YR3/4 暗褐色細砂 粗砂・φ5cm以下の円礫多量混じる</p> <p>33 10YR2/2 黒褐色土 粗砂混じる</p> <p>34 10YR2/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト・土器細片混じる</p> <p>35 10YR4/3 におい黄褐色細砂 粗砂・φ10cm以下の円礫多量混じる</p> <p>36 10YR3/3 暗褐色細砂 シルト・φ20cm以下の円礫混じる</p> <p>37 10YR2/3 黒褐色細砂 シルト・φ15cm以下の円礫・土器細片混じる</p> <p>38 10YR3/2 黒褐色細砂 シルト混じる</p> <p>39 10YR3/2 黒褐色細砂 シルト混じる</p> <p>40 10YR3/1 黒褐色細砂 粗砂・シルト混じる</p> | <p>41 10YR3/3 暗褐色土 土器細片混じる 【第2面】</p> <p>42 10YR3/2 黒褐色土 粗砂・土器細片混じる</p> <p>43 10YR3/2 黒褐色細砂 炭混じる (SD82)</p> <p>44 10YR2/2 黒褐色土 シルト混じる (SD82)</p> <p>45 10YR3/2 黒褐色土 炭・土器細片混じる (SD85)</p> <p>46 10YR3/1 黒褐色土 シルト混じる (SD86)</p> <p>47 10YR2/3 黒褐色土 粗砂・土器細片混じる</p> <p>48 10YR3/3 暗褐色土 φ10cm以下の円礫混じる (SK83)</p> <p>49 10YR3/2 黒褐色土 炭・土器細片混じる (SK132)</p> <p>50 10YR3/1 黒褐色土 土器細片混じる (SK133)</p> <p>51 10YR3/2 黒褐色土 土器細片混じる (SK129)</p> <p>52 10YR2/2 黒褐色土 土器細片混じる (SK146)</p> <p>53 7.5YR2/2 黒褐色土 土器細片混じる (SK146)</p> <p>54 10YR3/1 黒褐色土 (SK147)</p> <p>55 10YR2/2 黒褐色粗砂 シルト混じる (SK147)</p> <p>56 10YR4/2 灰黄褐色粗砂 シルト混じる (SK147)</p> <p>57 10YR4/6 褐色粘土 φ20cm以下の円礫多量混じる 【地山】</p> |
|---|--|--|

図6 調査区西壁土層断面図 (1:50)



- | | |
|--|--|
| 1 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 焼土・炭・瓦・漆喰混じる | 13 7.5Y2/3 極暗褐色土 焼土・炭多量混じる【第1面】 |
| 2 7.5Y3/2 黒褐色土 焼土・炭多量・瓦片混じる | 14 10YR3/2 黒褐色土 焼土混じる (SK163) |
| 3 10YR2/3 黒褐色土 炭多量混じる (SK22) | 15 10YR1.7/1 黒色土 炭多量混じる (SK163) |
| 4 7.5Y3/3 暗褐色細砂 焼土・炭混じる (SK164) | 16 10YR4/2 灰黄褐色土 |
| 5 7.5Y3/2 黒褐色細砂
焼土・炭・φ10cm以下の角礫多量・瓦片混じる (SK164) | 17 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土・炭・φ5cm以下の円礫
混じる (SK175) |
| 6 7.5Y3/2 黒褐色土 焼土・炭混じる (SK4) | 18 10YR3/3 暗褐色土 焼土・φ10cm以下の円礫混じる (SK175) |
| 7 7.5Y3/3 暗褐色土 焼土・炭多量混じる (SK4) | 19 10YR3/3 暗褐色土 焼土・炭混じる【第2面】 |
| 8 10YR3/3 暗褐色土 (SK4) | 20 10YR3/2 黒褐色土【第3面】 |
| 9 7.5Y3/4 暗褐色土 焼土・炭多量混じる (SK4) | 21 10YR2/2 黒褐色土 土器細片混じる |
| 10 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂 (SK75) | 22 10YR2/2 黒褐色細砂 シルト混じる (SK147) |
| 11 10YR3/4 暗褐色細砂 焼土・炭・φ0.5cm以下の円礫多量混じる (SK75) | 23 10YR4/2 灰黄褐色細砂 シルト混じる (SK147) |
| 12 10YR3/3 暗褐色細砂 φ3cm以下の円礫多量混じる (SK75) | 24 10YR4/6 褐色粘土 φ20cm以下の円礫多量混じる【地山】 |

図7 調査区北壁土層断面図 (1:50)

くつか確認できることから、南北に長い建物の存在が予想できる。さらに土間状遺構を切る形で南北方向の柵列SA01を確認した。

(3) 第4面 (室町時代中期以前) の遺構 (図8、図版5)

第4面 (地表下約1.4mの地山面) で検出した遺構群を、室町時代中期以前 (15世紀中葉以前) のものとした。これらの遺構群は、遺物をあまり含まない黒褐色の埋土を特徴としている。遺物は平安時代から室町時代前期頃のものを確認できるが、遺構から出土した遺物は少なく、出土しても小片にとどまる。

この段階の遺構分布の特徴としては、調査区東側に類似した形態の土坑群が南北に接続して確認されたのに対し、調査区西側は土坑や小穴などが散在するという点を挙げる事ができる。機能毎に区分された土地利用状況が想定できる。

第4面 東側土坑群 (SK103・104・105・114・120) (図9、図版5)

調査区東半で確認した、南北に連なる土坑群である。一部調査区外のため全体の規模は不明であるが、各土坑は東西1.4m以上、南北1m前後の東西に長い平面楕円形を呈し、底には小穴が2基以上並ぶ。小穴の径はいずれも0.7m程度であるが、深さは0.15~0.3mと一定しない。埋土からの遺物は土師器皿の小片のみであり、遺物から時期を確定は難しい。遺構の性格については、小穴が整然と規則的に接続する状況が、平安京左京四条四坊二町跡や、平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡などで検出された埋甕¹⁹⁾採取土坑群と類似している。本土坑群も、埋甕の据え付け穴である可能性がある。

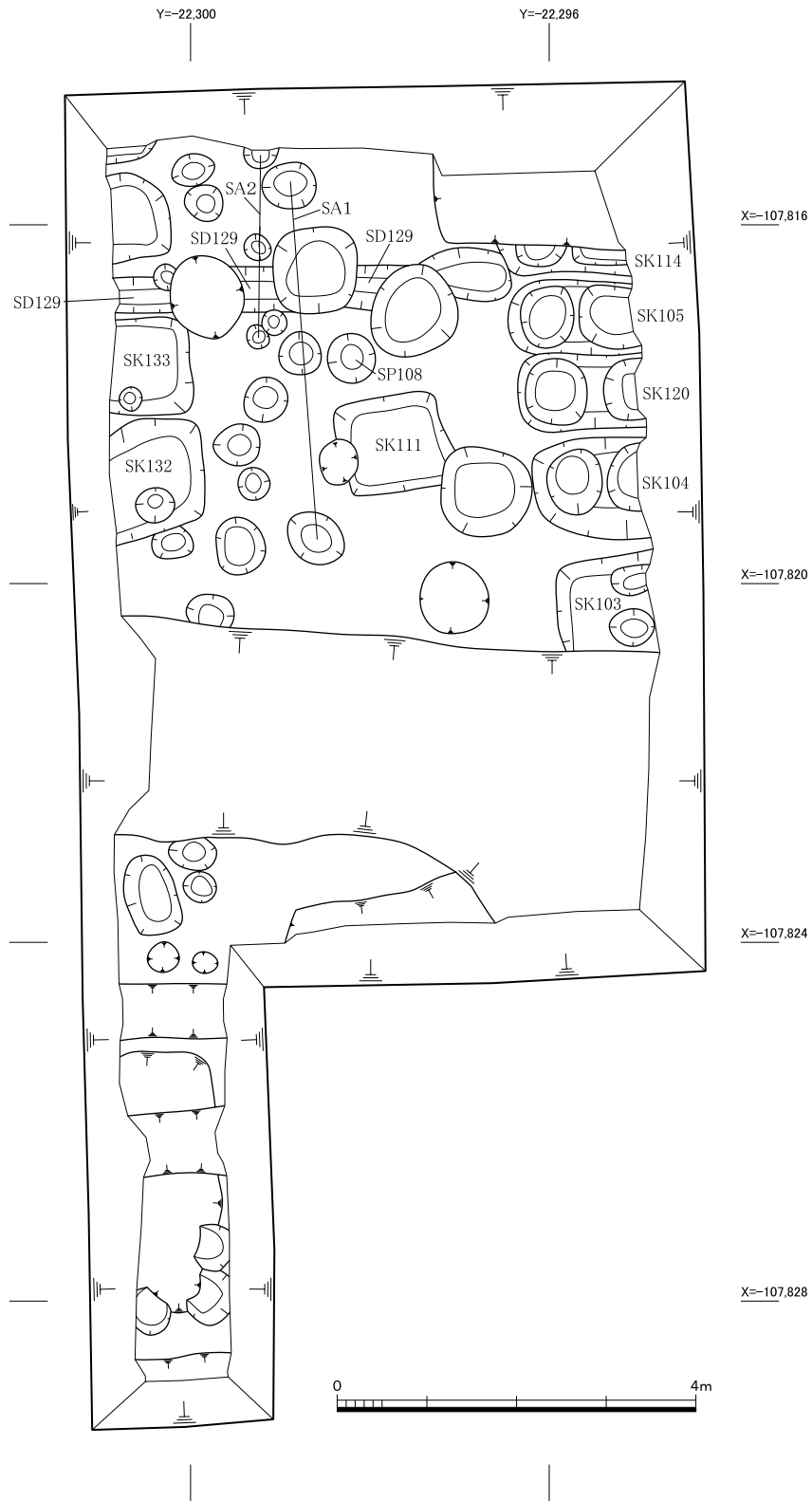


図8 第4面(室町時代中期以前)遺構平面図(1:80)

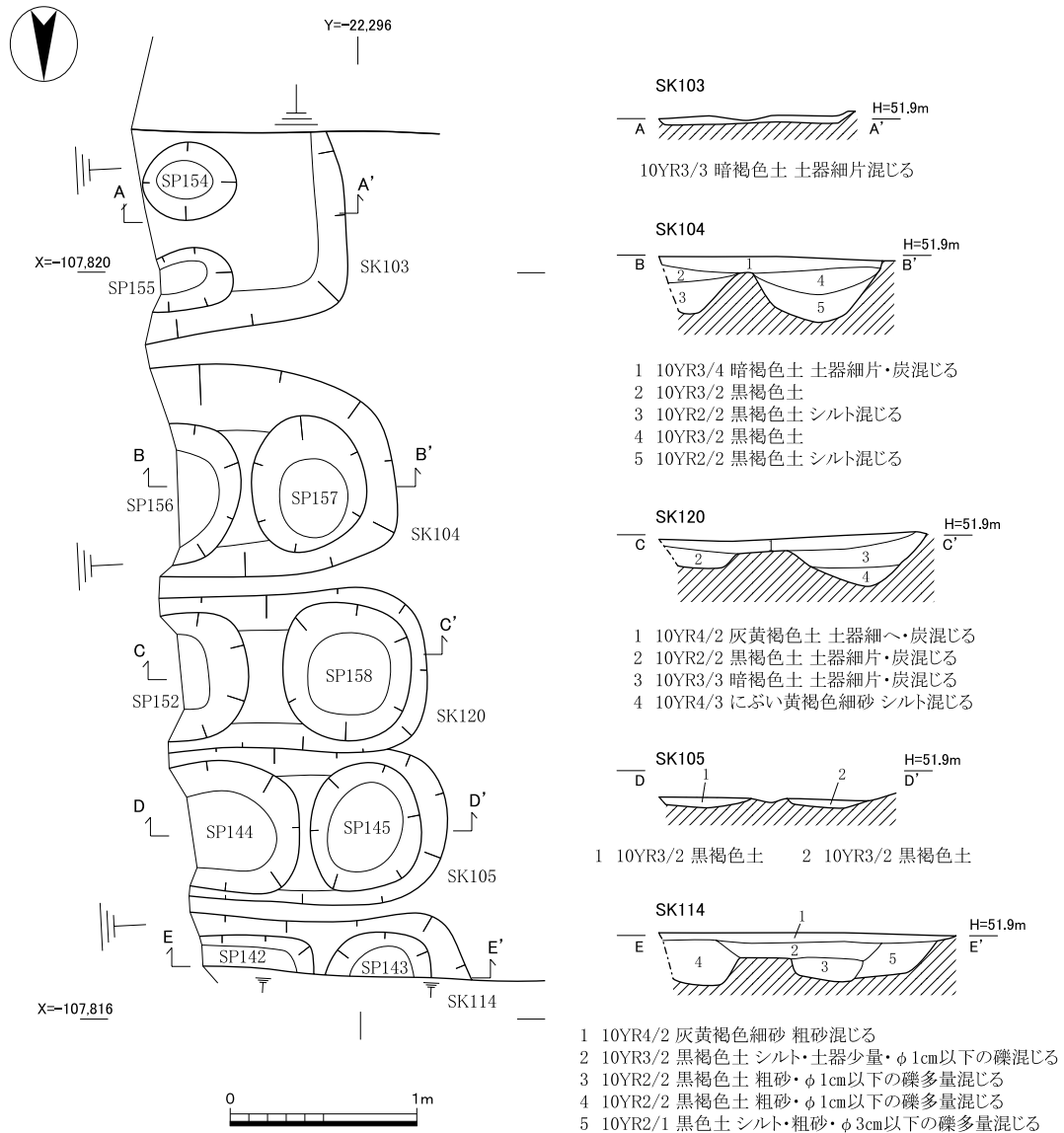


図9 調査区東側土坑群実測図 (1 : 30)

SK103 土坑群の南端で確認した平面方形の土坑。SD78に削平される。また遺構の一部が調査区外にあたるため、全体の規模は不明である。深さ0.1m未満と浅い。内底面に小穴 (SP154・155) が南北にやや距離をおいて並ぶ。他の土坑とはやや距離が離れ、かつ平面形や小穴の敷設状況がSK103より北の土坑群とは異なる。他の土坑群とは区別して考えるべきかもしれない。SP154は径0.4m、深さ0.2m。SP155は径0.7m、深さ0.2mを測る。

SK104 土坑群の南側で検出した東西に長い平面楕円形の土坑。径0.9m以上×1.1m、深さ0.1m。内底面に、断面撻鉢状の小穴 (SP156・157) が東西に並ぶ。SP156は径0.7m前後、深さ0.3m。SP157は径0.7m×0.6m、深さ0.26m以上。

SK120 土坑群の中央で検出した東西に長い平面楕円形の土坑。SK105と接している。径1.4m以上×0.8m、深さ0.1m。内底面に断面撻鉢状の小穴 (SP152・158) が東西に並ぶ。SP152は径0.7m前後、深さ0.22m以上。SP158は径0.7m、深さ0.2m。

SK105 土坑群の北側で検出した東西に長い平面楕円形の土坑。SK120と遺構の掘形を接している。径1.5m以上×0.8m、深さ0.1m。内底面に、極めて浅い小穴（SP144・145）が東西に並ぶ。SP144は径0.7m前後、深さ0.08m。SP145は径0.7m×0.6m、深さ0.06m。

SK114 土坑群の北端で検出した東西に長い平面楕円形の土坑。北半を攪乱で削平されている。長径1.5m、深さ0.15m。内底面に断面播鉢状の小穴（SP142・143）が東西に並ぶ。SP142は径0.7m前後、深さ0.2m。SP143は径0.6m、深さ0.16m。埋土から白色土器の高杯片が出土した。

第4面 調査区西側の遺構

SA1（SP127・131・151）（図10） 調査区北側で確認した南北方向の小穴列である。小穴はいずれも平面円形で直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。柱間は1m前後である。

SA2（SP126・130・159）（図10） 調査区北側で確認した南北方向の小穴列である。小穴はいずれも平面円形で直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.2mを測る。柱間は1m前後と間隔がせまく、また東西方向には対となる小穴は確認していないため、柵列となる可能性がある。

SP108 調査区中央で確認した平面円形の小穴である。径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色を呈する。

SD129 北側で確認した東西方向の溝である。幅0.4m、深さ0.3mを測る。西側は調査区外にの

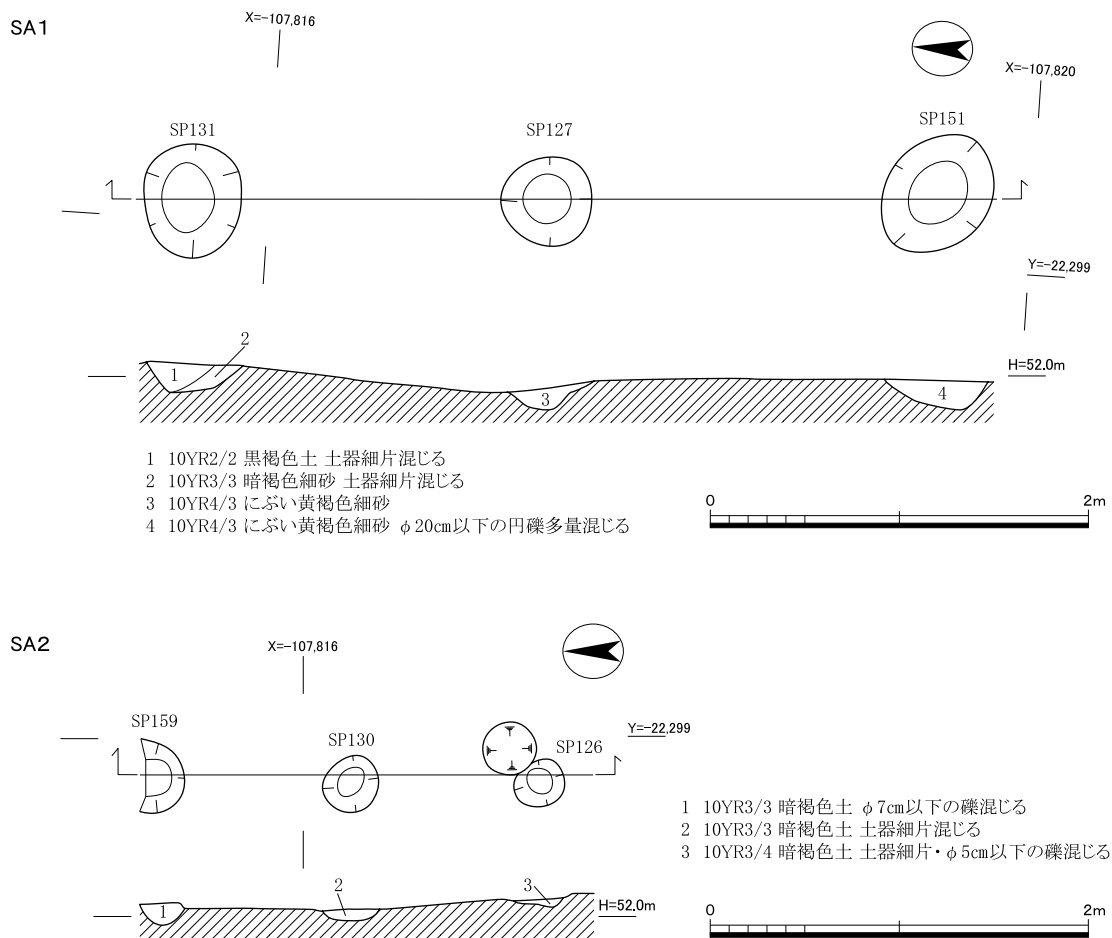


図10 小穴列SA1・2実測図（1：40）

びる。土師器の細片が出土したが、図示できるものはない。

SK111 調査区中央で確認した平面方形の土坑である。上面が攪乱で削平されている。径1.2m、深さ0.1mを測る。埋土は黒褐色を呈し、土器の細片を包含するが、図示できる遺物は出土していない。

SK132 調査区東側で確認した平面方形の土坑である。一部が調査区外に当たるため全体の規模は不明であるが、径1.8m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色を呈し、土器の細片を包含するが、図示できる遺物は出土していない。

SK133 調査区東側で確認した平面方形の土坑である。一部が調査区外に当たるため全体の規模は不明であるが、径1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色を呈し、土器の細片を包含するが、図示できる遺物は出土しなかった。

(4) 第3面（室町時代中期）の遺構（図12、図版4）

第3面（地表下約1.0m）で検出した15世紀中葉から15世紀末の遺構群を、室町時代中期のものとした。この段階の遺構分布は、現武者小路通に面する調査区南側に東西方向の区画溝を2条配し、調査区北側に土坑や小穴が分布するという特徴がある。

第3面 南側区画施設（図11）

SD82 調査拡張区南端で検出した東西方向の溝状遺構である。遺構の半分以上が調査区外にあたるため全体の規模は不明であるが、確認できただけでも幅1.0m、深さ0.7mを測る。現武者小路

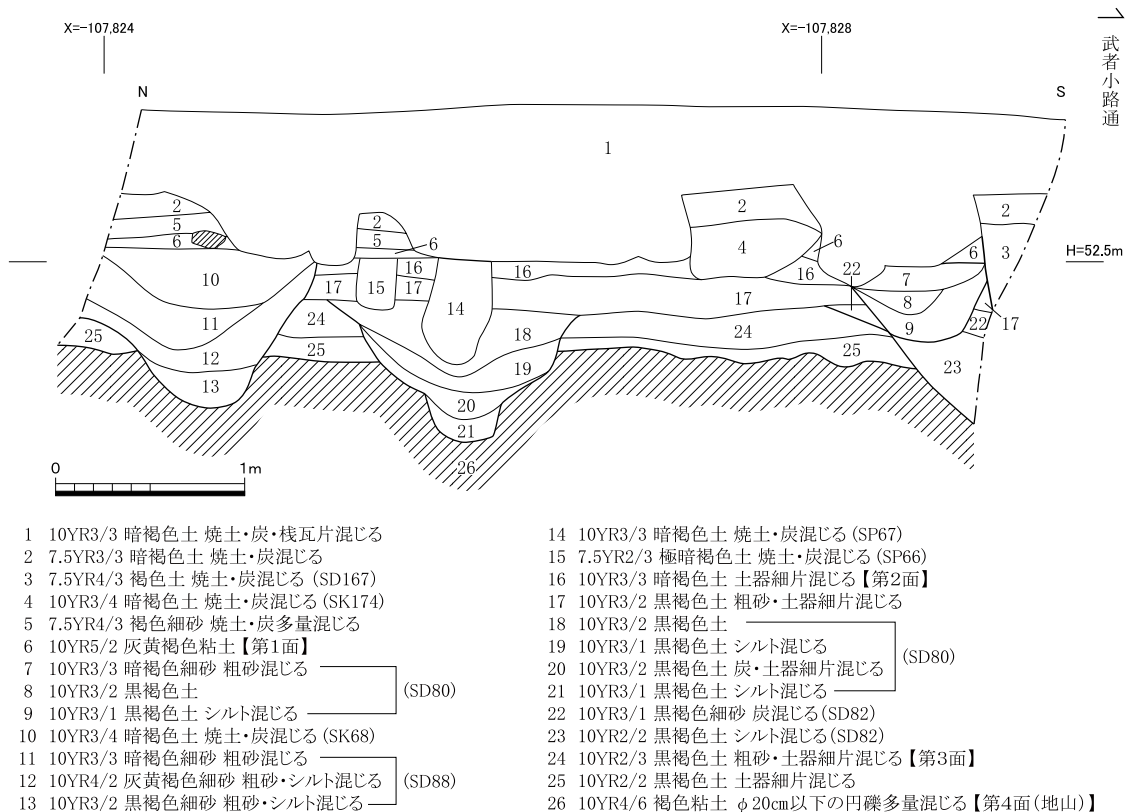


図11 調査区南拡張区東土層断面図（1：40）

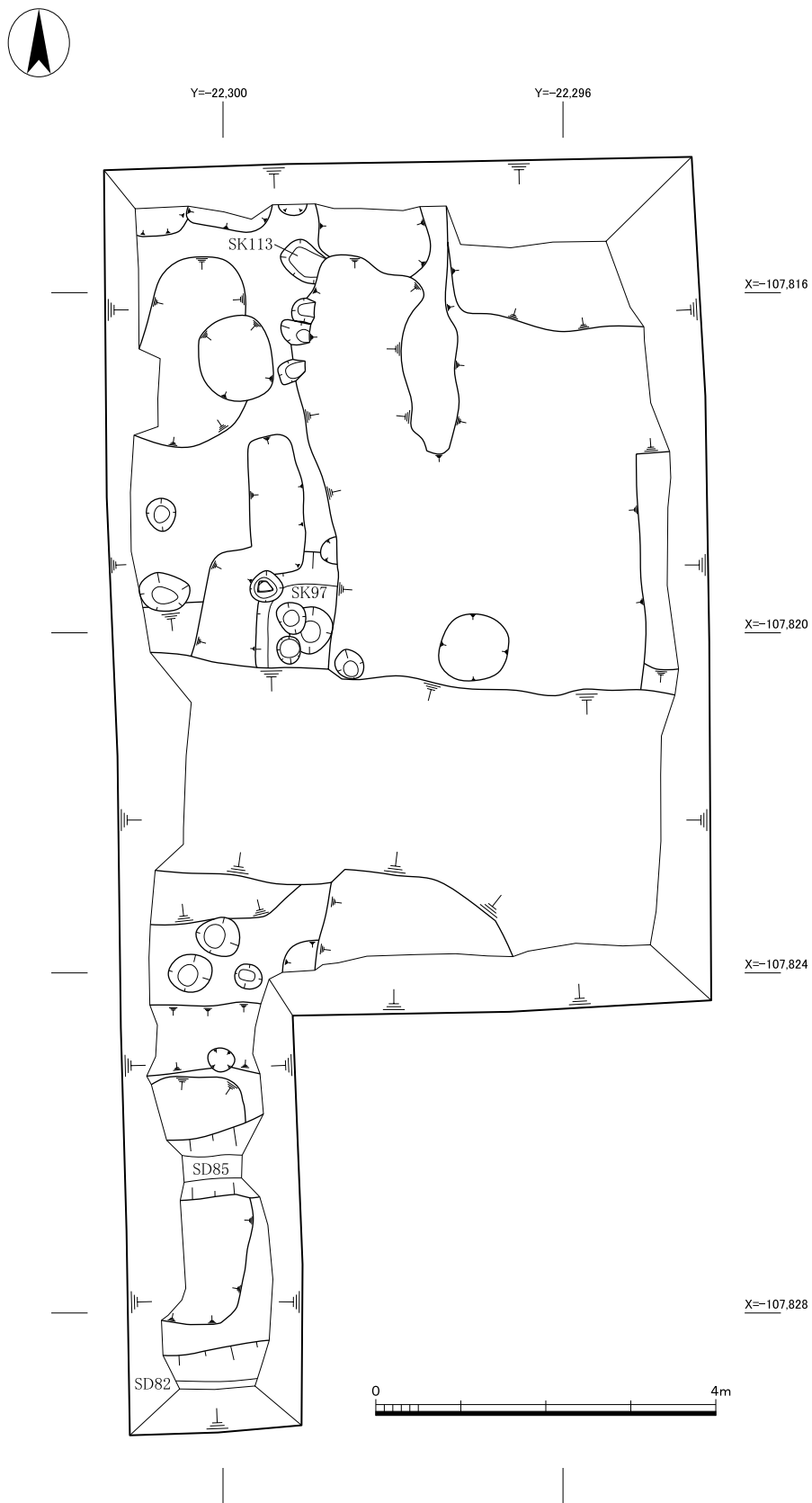


图12 第3面（室町時代中期）遺構平面図（1：80）

通北端に位置しており、道路側溝であると判断している。後述する第1面SD167、第2面SD80と重複関係にあり、SD82→SD80→SD167の順に成立している。

SD85 (図版4) 調査拡張区で検出した東西方向の溝状遺構である。断面は葉研掘状を呈する。攪乱におおきく削平されているものの、拡張区東壁から判断すると幅1.3m、深さ0.75mを測る。埋土からは15世紀後葉の土師器皿とともに、国産の施釉陶器(瀬戸碗)が出土している。

第3面 調査区北側の遺構

SK97 調査区中央で検出した土坑である。攪乱やSD78によって削平をうけており、規模は不明である。遺構内からは15世紀中葉の土師器皿がまとまって出土している。

(5) 第2面(室町時代後期)の遺構(図13、図版2)

第2面(地表下約0.7m)で検出した16世紀前葉から16世紀中葉の遺構群を、室町時代後期のものとした。この段階の遺構分布は、第3面と同様の遺構配置をとっており、現武者小路通に面する調査区南側に東西方向の区画溝を2条配し、調査区北側には土坑や小穴が分布している。

また、16世紀中葉の一時期には、区画溝よりも規模が大きな堀が掘削される。堀は区画溝が配された箇所よりも北側に位置している。従来の区画施設との関係は不明である。

第2面 南側区画施設(図11)

SD80 調査区南端で検出した東西方向の溝状遺構である。断面U字形を呈する。幅1.0m、深さ0.4mを測る。SD82とほぼ同じ位置関係をとることから、旧武者小路通の道路側溝であると判断している。埋土からは16世紀中葉の土器が出土している。

SD88 (図版2) 調査拡張区で検出した東西方向の溝状遺構である。断面U字形を呈する。幅1.5m、深さ0.8mを測る。SD80から北へ約2.9mの距離をとって平行している。南側の街路と北側の屋敷地とを区画した溝と考えている。埋土からは16世紀中葉の土器が出土している。

SD78(図14、図版3) 調査区南側で確認した堀である。幅3.5m、深さ1.4mを測る。礫混じりの地山層を垂直に近い急角度で掘り込み、底面を平坦に掘削した結果、断面は逆台形を呈する。堀の西側の延長は調査区外にのびる。東側は調査区の中央部において南側に直角に折れ、そのまま調査区外にのびる。従来の区画施設および旧街路との関係は不明である。

溝の埋土はおおきく上下2層に区分したが、土層は比較的短期間に埋没した状況が窺え、掘り直しの痕跡は認められない。礫混じりの地山層を深く掘削していることから水捌けは良い。堀の底は西から東へとわずかに傾斜を下けているが、土層には常に水を湛えていたことを示す痕跡は認められない。空堀であったと考えられる。埋土には円礫を大量に含む砂層が確認できるが、地山の粘土などは含んでいない。周囲からは土塁の痕跡は確認できなかった。埋土の上層からは16世紀後葉、下層からは16世紀前葉から中葉の土器が出土した。また青磁酒会壺や青白磁合子、「卍」と墨書された白磁碗などの輸入陶磁器が出土している。

第2面 調査区南側のその他遺構

SP66 調査区南側拡張区で検出した小穴である。遺構の西側を攪乱で削平され、かつ東側が調

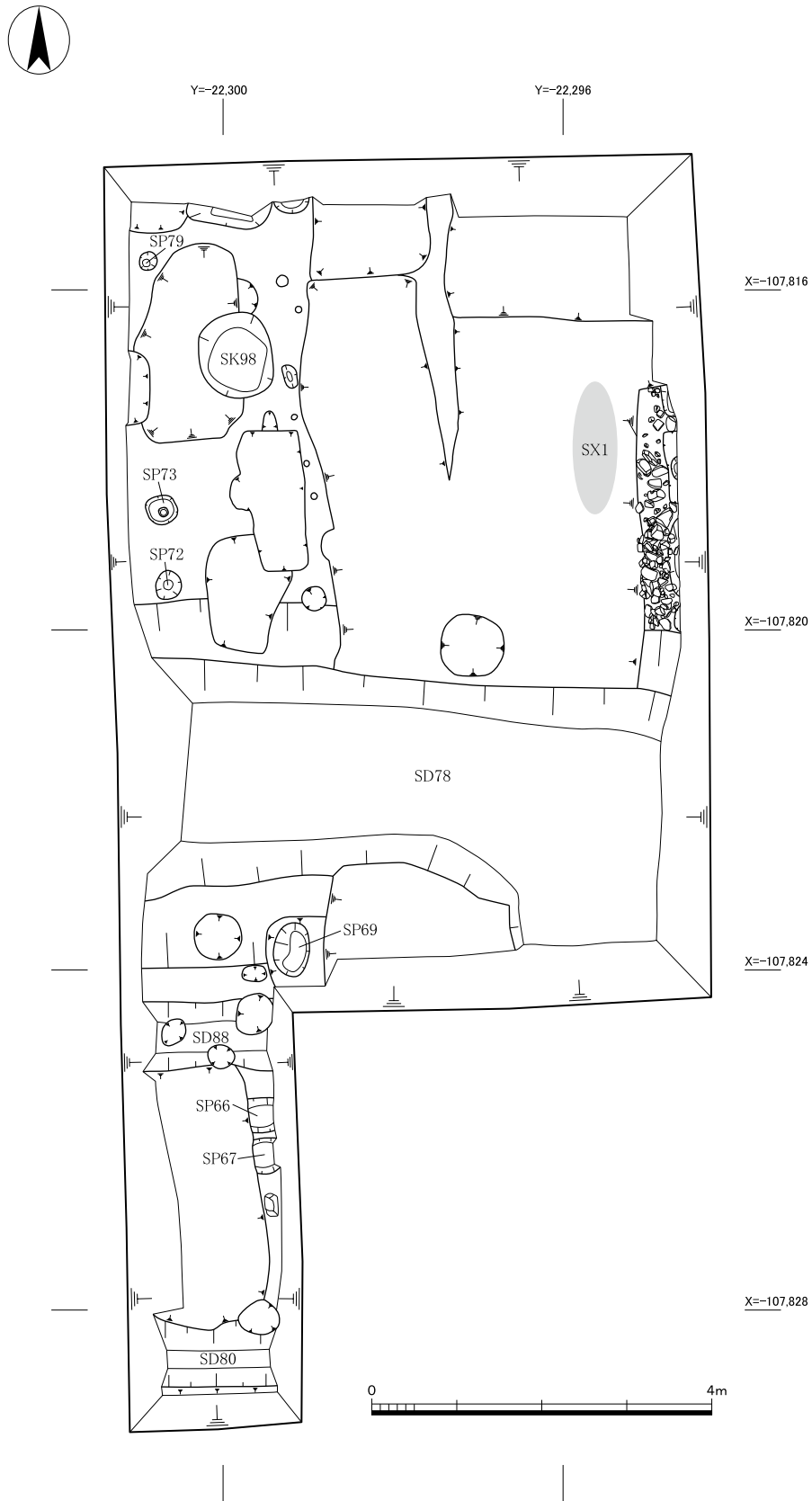
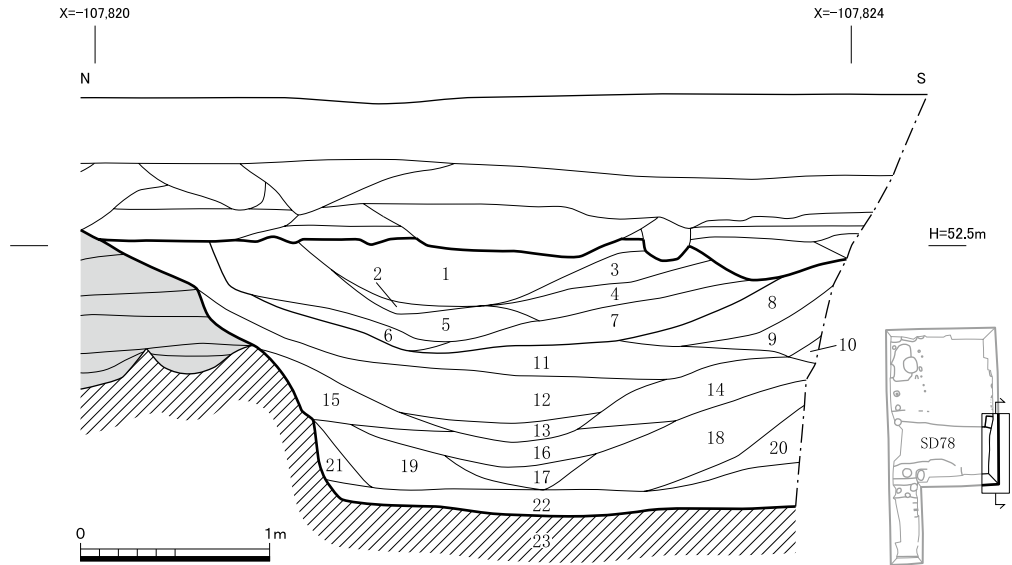


图13 第2面（室町時代後期）遺構平面図（1：80）



- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 焼土・炭・φ10cm以下の円礫混じる | 13 10YR3/1 黒褐色細砂 粗砂・シルト混じる |
| 2 10YR3/3 暗褐色細砂 | 14 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂・シルトφ3cm以下の円礫多量混じる |
| 3 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・焼土・φ5cm以下の円礫混じる | 15 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂・シルト混じる |
| 4 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂・φ5cm以下の円礫混じる | 16 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ15cm以下の円礫混じる |
| 5 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト混じる | 17 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂・シルト・φ10cm以下の円礫混じる |
| 6 10YR2/3 黒褐色土 土器細片混じる | 18 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ25cm以下の円礫多量混じる |
| 7 10YR2/3 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ5cm以下の円礫混じる | 19 10YR3/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ15cm以下の円礫混じる |
| 8 10YR3/3 暗褐色細砂 粗砂・φ3cm以下の円礫多量混じる | 20 10YR3/1 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ15cm以下の円礫混じる |
| 9 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 粗砂多量混じる | 21 10YR2/2 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ10cm以下の円礫混じる |
| 10 10YR3/2 黒褐色土 粗砂混じる | 22 10YR3/1 黒褐色細砂 粗砂・シルト混じる |
| 11 10YR2/3 黒褐色細砂 粗砂・シルト・φ5cm以下の円礫混じる | 23 10YR4/6 褐色粘土 φ20cm以下の円礫多量混じる【地山】 |
| 12 10YR2/2 黒褐色細砂 焼土・炭混じる | |

図14 SD78南北土層断面図（1：40）

査区外に当たるため全形は不明であるが、検出箇所は径0.4m、深さ0.3mを測る。暗褐色の埋土には焼土や炭が混入する。

SP67 調査区南側拡張区で検出した小穴である。検出箇所は径0.4m、深さ0.3mを測る。黒褐色の埋土には焼土や炭が混入している。

SP69 調査区の南側で検出した平面楕円形の穴である。長径0.6m×短径0.4m、深さ0.4mを測る。黒褐色を呈する埋土には焼土や炭が混入していた。土師器皿や瀬戸天目碗が出土している。

第2面 調査区北側の遺構

SP72 調査区の西側で検出した小穴である。径0.3m、深さ0.1mを測る。

SP73 調査区の西側で検出した小穴である。径0.4m、深さ0.2mを測る。焼土混じりの灰黄褐色細砂を埋土とする。土師器鍋の片が出土したが、図示できるものはない。

SP79 調査区の西側で検出した小穴である。径0.2m、深さ0.1mを測る。焼土混じりの黒褐色土を埋土とする。出土遺物に図示できるものはない。

SK98 調査区北側で確認した平面円形の土坑である。径1.9m、深さ0.8mを測る。埋土から16世紀中葉の土器が出土している。

SX1 調査区東側で検出した土器集積。16世紀中葉の土師器皿や瀬戸卸皿、瀬戸深皿、瓦器ミニチュア三足羽釜が出土している。

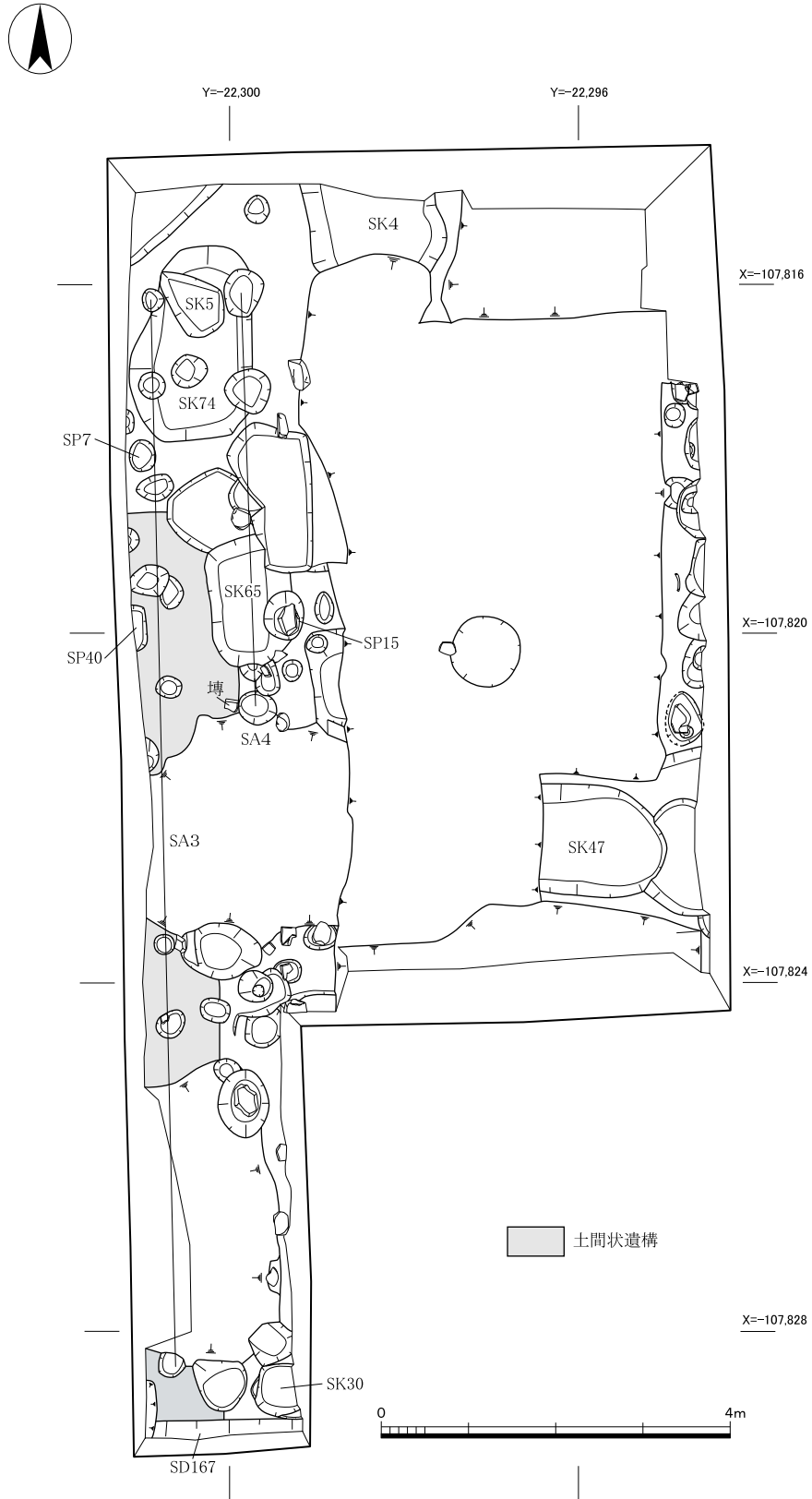


図15 第1面（安土桃山時代から江戸時代前期）遺構平面図（1：80）

(6) 第1面（安土桃山時代から江戸時代前期）の遺構（図15、図版1）

第1面（地表下約0.5m）で検出した16世紀後葉から17世紀前葉の遺構群を、安土桃山時代から江戸時代前期の遺構とした。この段階の遺構分布は、調査区南側の現武者小路通沿いに東西方向の区画溝を配し、その北側に土間状遺構や小穴等が、南北方向に軸をもって分布することを特徴とする。

また、第1面より上層は、火災に伴うと考えられる焼土や炭を多量に含む。層位から、江戸時代から明治時代にかけて、調査地周辺で数度にわたって火災があったものと考えられる。16世紀後葉のものと考えられる土間状遺構表面にも被熱痕があることから、規模は不明ながら、当該期にも周辺で火災が生じた可能性が高い。

SD167 調査拡張区南端で検出した東西方向の溝状遺構である。遺構の北端部分を検出したのみで全体の規模は不明であるが、確認できただけでも幅0.3m、深さ0.7mを測る。現武者小路通北端に位置しており、道路側溝の可能性が高い。埋土から16世紀末から17世紀前葉の土師器皿が出土した。

土間状遺構 調査区西側で検出した、たたきによる南北方向の土間状遺構である。検出した範囲は全長11m、幅0.9mを測る。粘土と細かい砂でつくられた床面直上に焼土や炭を多量に含む層（8層：図6）が堆積しており、遺構表面も一部黒変している。出土遺物はないが、SP40（17世紀前葉）、SK65（16世紀後葉）、SD78（16世紀中葉）と重複関係にあり、SD78→土間状遺構→SP40・SK65の順に成立する。また、SP40は火災層である8層（図6）から掘りこまれていることを確認した。土間状遺構の廃絶時期及び火災層（8層）が生じた時期は、16世紀後葉頃と考えられる。

SA 3 (SP10・39・45・46・53・56・67・68) (図17) 調査区西側で検出した南北方向の柵列である。柱間は1m前後である。柱穴はいずれも円形で直径0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mを測る。土間状遺構やSK74と重複しており、SA 3が新しい。16世紀後葉より新しい遺構と考えられる。

SA 4 (SP32・57・58・60) (図17) 調査区西側で検出した南北方向の柵列である。柱間は1.2m前後である。柱穴はいずれも円形で直径0.5～0.6m、深さ0.1～0.2mを測る。土間状遺構と重複しており、SA 4が新しい。SK74と重複しており、16世紀後葉より新しい遺構と考えられる。

SP 7 (図16、図版1) 調査区西側で検出した平面楕円形の穴である。径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土から16世紀末から17世紀前葉の土器が一括して出土した。

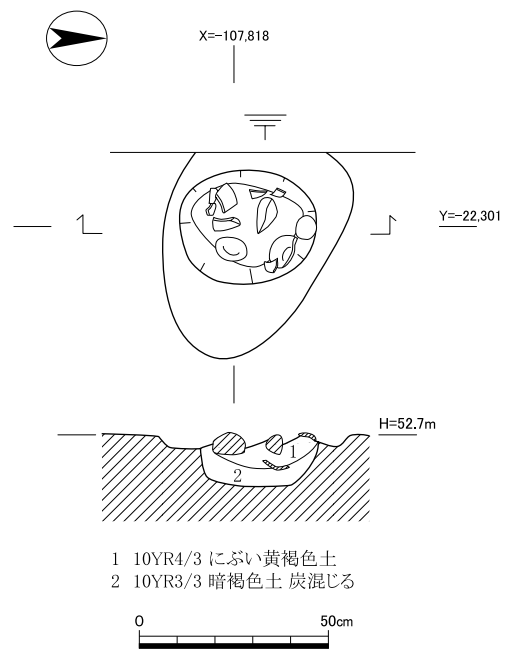
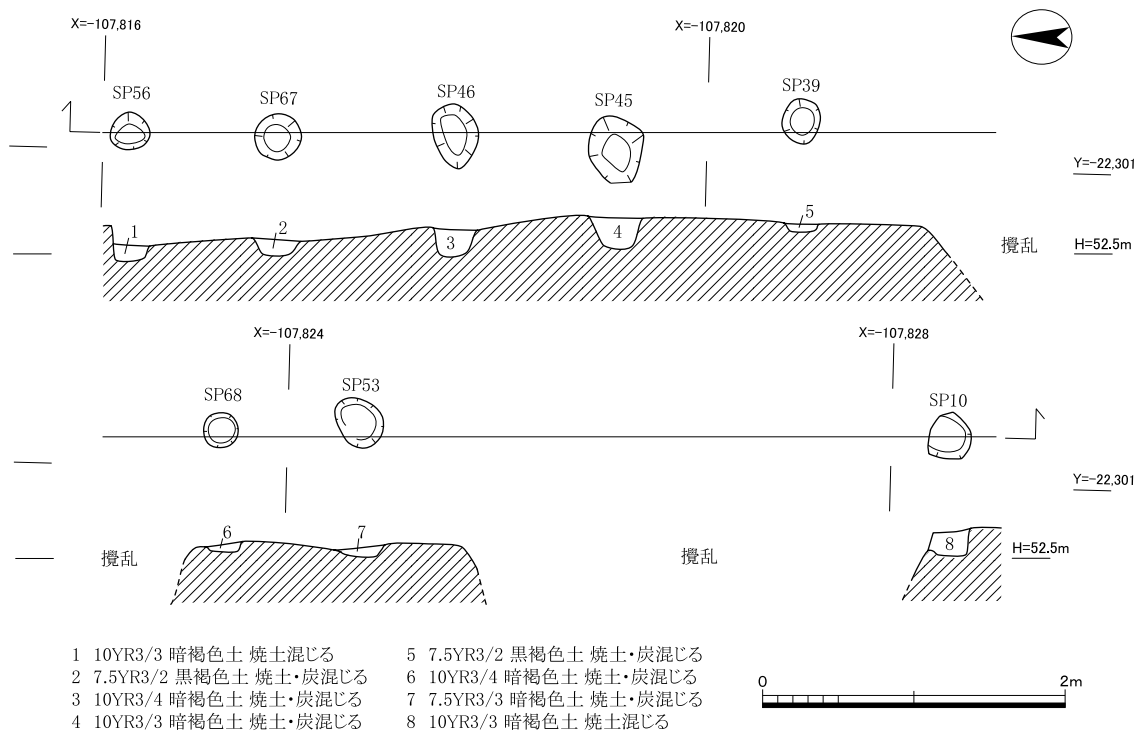


図16 SP7実測図（1：20）

SA3



SA4

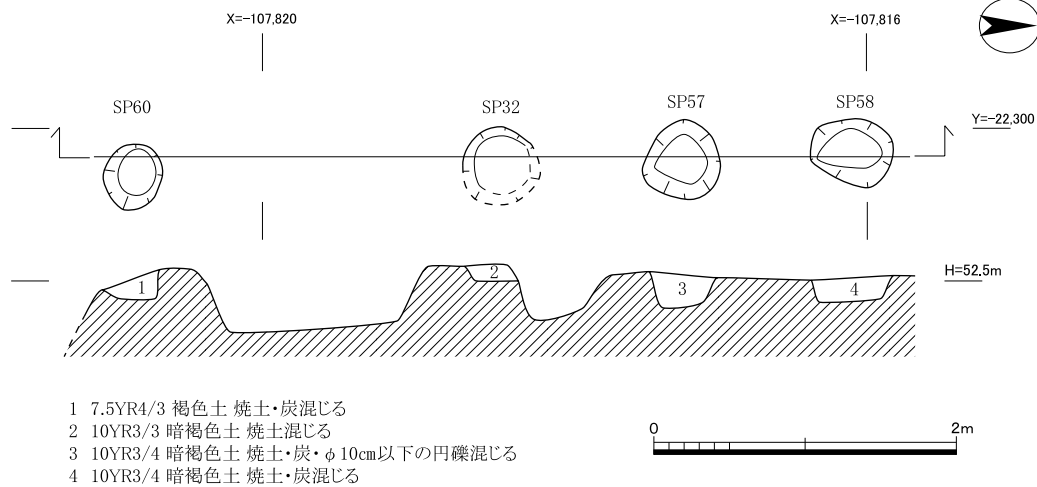


図17 小穴列SA3・4実測図(1:50)

SP40 調査区西側で検出した。径0.7m、深さ0.5mを測る。遺構の半分が調査区外であり、全掘はしていない。埋土から17世紀前半の土師器小皿や青磁椀が出土した。

SP15 調査区中央部で検出した平面楕円形の礎石据え付け穴である。径0.5m、深さ0.2mを測る。埋土から土師器の鍋が出土した。

SK4 調査区の北端で検出した平面方形の土坑である。一部が調査区外にあるため全体の規模は不明であるが、検出規模は径1.5m、深さ0.8mを測る。埋土は焼土や炭を多く含む。

SK47 調査区の東側で検出した楕円形の土坑である。一部が攪乱により削平されているために全形は不明であるが、検出規模は長径2.2m×短径2.0m、深さ0.7mを測る。埋土には焼土や炭と

ともに、大量の角礫が混じる。16世紀末から17世紀初頭の土器が出土した。

SK65 調査区の中央で検出した平面長方形の土坑である。長径1.3m × 短径0.9m、深さ0.6mを測る。埋土には焼土や炭が混じる。16世紀後葉の土師器皿や土師器鍋、瓦器の鉢が出土した。

SK74 調査区北西で検出した平面長方形の土坑である。長径2.5m以上 × 短径1.4m、深さ0.6mを測る。角礫が混じる埋土からは16世紀後葉の土師器皿とともに、墨書された信楽産の播鉢片が出土した。

註

18) 遺構から出土した遺物の年代観は次の文献に依拠した。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

平尾政幸・山口 真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003 - 5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年

19) 下記文献参照。

網 伸也・柏田有香『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 - 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年

東 洋一・山本雅和・能芝妙子・近藤奈央『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008 - 12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年

4. 遺 物

(1) 出土遺物の概要

出土遺物はコンテナで21箱出土した。内訳は土器類が20箱、金属類1箱である。15世紀中葉（室町時代中期）以降に属するものが主体を占める²⁰⁾。

室町時代中期以前 土師器（皿・高杯）、須恵器（杯・甕）、白色土器（高杯）、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器（鍋）、施釉陶器、焼締陶器（甕）、輸入陶磁器（青磁・白磁）、瓦（山城産）がある。平安時代後期からの遺物が認められる。いずれも散発的な出土状況であり、各遺構などから混入した状態で確認した。小片が多い。

室町時代中期（15世紀中葉から16世紀初頭） 土師器（皿）、瓦器（鍋）、施釉陶器、須恵質陶器（播鉢）、焼締陶器（甕）、輸入陶磁器（青磁）、瓦がある。SK97からは土師器（皿）、瓦器、東播系の須恵質陶器（播鉢）が出土している。

室町時代後期（16世紀前葉から中葉） 土師器（皿）、瓦器（鍋・羽釜・火鉢）、施釉陶器、焼締陶器（播鉢・壺・甕）、輸入陶磁器（青白磁・青磁・白磁）、瓦がある。堀（SD78）埋土下層からは、土師器（皿）、瓦器（羽釜・鍋・火鉢）、施釉陶器（瀬戸壺・瀬戸卸皿）、焼締陶器（播鉢・壺・甕）、墨書のある白磁（椀）、青白磁（合子）、龍泉窯産の青磁（酒会壺）などが出土している。

安土桃山時代から江戸時代前期（16世紀後葉から17世紀初頭） 土師器（皿）、瓦器（椀・鉢・鍋・羽釜・焙烙・火鉢）、施釉陶器（唐津椀・美濃丸皿・美濃天目椀）、焼締陶器（播鉢・甕）、輸入陶磁器（青磁椀・白磁皿・染付椀）、土製品（焼塩壺・陶硯・泥面子）、瓦、金属製品（銭貨）がある。また8層から塼が出土している。SP7からは土師器（皿）や、瓦器（椀）などが一括して出土した。SP40からは土師器（皿）や青磁（椀）などが出土した。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
室町時代中期 以前	土師器、須恵器、白色土器、 緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、 施釉陶器、焼締陶器、輸入陶 磁器、瓦		土師器1点、白色土器1点、 緑釉陶器1点、灰釉陶器1点、 瓦1点		
室町時代中期	土師器、瓦器、施釉陶器、須 恵質陶器、焼締陶器、輸入陶 磁器、瓦		土師器10点、瓦器1点、施釉 陶器1点、須恵質陶器1点		
室町時代後期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼 締陶器、輸入陶磁器、瓦		土師器15点、瓦器8点、施釉 陶器2点、焼締陶器2点、輸 入陶磁器5点		
安土桃山時代 ～江戸時代前期	土師器、瓦器、施釉陶器、焼 締陶器、輸入陶磁器、土製品、 瓦、金属製品		土師器28点、瓦器4点、施釉 陶器5点、焼締陶器5点、輸 入陶磁器6点、土製品4点		
合 計		26箱	102点（3箱）	2箱	21箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より5箱多くなっている。

(2) 室町時代中期以前の遺物

この時期の遺物は同定できるものが少なく、また遺構から出土したものもほとんどないため、ここで一括して報告する。なお、これより新しい時期の遺構から出土した遺物については、当該期の所産であっても、各遺構出土遺物として報告している。

第4面検出中出土遺物 (図18-1・2) 第4面検出中に出土した。灰釉陶器(椀)、瓦がある。

山茶椀(1)がある。口径15.5cm、底径7.6cm、器高5.0cm。体部下半の張りは弱く、口縁部が外反する。底部は糸切痕をそのまま残し、断面三角形の高台を貼り付けている。平安時代後期。

唐草文軒平瓦(2)がある。瓦当部成形は折り曲げ技法。凸面タテ縄叩きで、瓦当部と凹面に布目が残る。平安時代後期から鎌倉時代。

SK104出土土器 (図18-3) 近江産の緑釉陶器の椀(3)がある。底部片で高台を欠く。胎土は須恵質に焼成されている。平安時代中期。

SK114出土土器 (図18-4) 白色土器の高杯(4)がある。摩耗しており、調整は不明である。平安時代後期。

SK113出土土器 (図18-5) 土師器は皿S(5)が出土している。口径8.9cm、器高1.9cm。白色系の胎土である。体部にナデ調整を施す。鎌倉時代。

(3) 室町時代中期の遺物

SK97出土土器 (図18-6~15) 土師器(皿)、瓦器(鍋)、須恵質陶器(播鉢)がある。土師器(皿)は図化したもの以外にも大量に出土した。

土師器皿は皿N(8~11)と皿Sh(6・7)、皿S(12~14)を図化した。皿Nは法量に大小がある。8は口径7.3cm、器高1.5cm。胎土は赤褐色系。底部周辺から体部下端にかけてのオサエにより器壁は薄く、体部中位から口縁部にかけては器壁の厚みが増す。10は口径10.1cm、器高2.2cm。胎土は赤褐色系。底部周辺から体部下端にかけてのオサエにより器壁は薄く、体部はゆるく外反する。体部中位から口縁部にかけては器壁の厚みは増し、口縁端部を丸くおさめる。11は口径10.2cm、器高1.8cm。体部は、平底の底部周辺から強く立ち上がり、体部下端にかけてのオサエにより器壁を薄くしあげる。10とくらべて全体的に器壁を薄く仕上げしており、器高も低いため扁平な印象をうける。皿Shはいわゆる「へそ皿」である。大量に出土したが、いずれも法量がほぼ同じで白色系の胎土を有する。6は口径6.8cm、器高2.0cm。7は口径6.7cm、器高2.1cm。いずれも底部中央の凹みは明瞭。13は外面に爪跡を残す。皿Sは口径11~14cm、器高3cm前後のものを確認でき、口径11~12cm台のものが主体となる。器形は器高の深さを保ちつつも口径にくらべて底径が小さい、いわゆる椀形を呈する個体を主とする。12は口径12.0cm、器高2.7cm。口縁部はヨコナデにより内湾し、端部を上方に向けて丸くおさめている。13は口径11.7cm、器高2.6cm。白色系の胎土を有する。体部は底部から丸みをもって立ち上がる。口縁部は12と同様、ヨコナデによって内湾し、端部を上方に向けて丸くおさめる。14は口径13.9cm、器高3.3cm。全体的に器壁を薄く仕上げる。

瓦器は鍋（15）がある。口径24.6cm、器高9.3cm。外面にススが付着する。調整は外面が口縁部をヨコナデ、体部をユビオサエとナデで仕上げる。内面は横位のナデ調整。体部は底部との接合部を境に、やや外反して立ち上がる。口縁部は蓋受けを備え、形態は断面L字状を呈して端部に面を作り出している。

須恵質陶器は東播系の播鉢（16）がある。口径31.4cm、器高10.4cm（復元値）、底径12.4cm。口

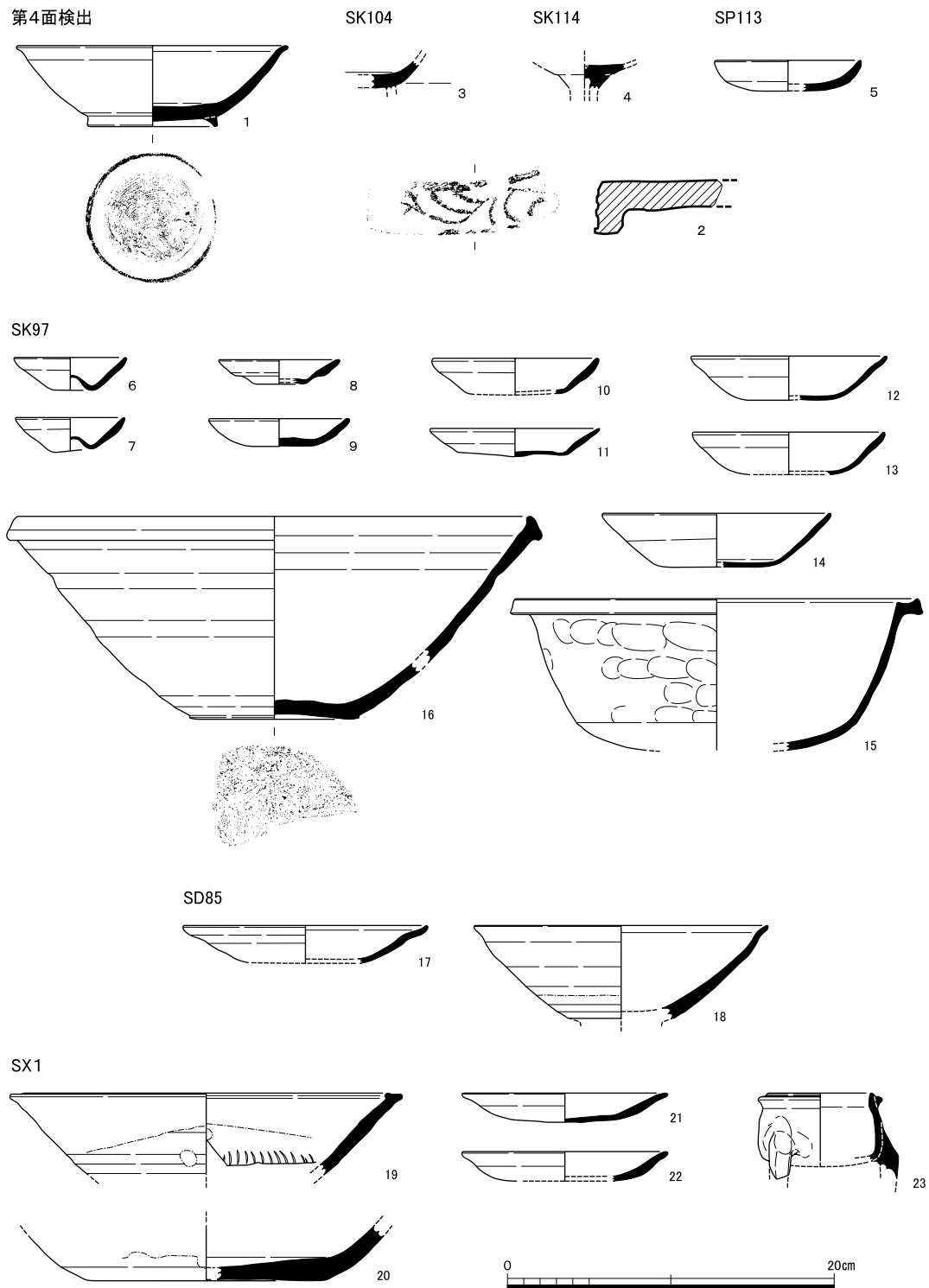


図18 遺物実測図1 (1:4)

縁端部を上下に肥厚させる。底部に糸切痕。内面は摩耗している。

SD85出土土器（図18-17・18） 土師器（皿）、施釉陶器（瀬戸平椀）がある。

土師器皿は皿S（17）が図化できた。口径14.9cm、器高2.3cm。底部から体部への立ち上がりは丸みをもって開き、体部はやや外反する。口縁部は端部に向かって緩く内湾し、先端を上方に向けて丸く処理している。

国産の施釉陶器には瀬戸灰釉平椀（18）がある。口径17.9cm。体部は直線的に開き、口縁部をわずかに外反させる。体部外面の下半から底部にかけて露胎している。

（4）室町時代後期の遺物

SX1出土土器（図18-19～23） 第4面東側土坑群の上層（41層）から出土した土器群である。土師器（皿）、瓦器（ミニチュア三足羽釜）、施釉陶器（瀬戸卸皿・瀬戸深皿）がある。

土師器皿は皿S（21・22）がある。いずれの個体も体部は底部から丸みをもって大きく立ち上がり、口縁部は外反している。21は口径12.4cm、器高1.8cm。22は口径12.4cm、器高1.8cm。

瓦器はミニチュア三足羽釜（23）が出土している。口径6.2cm。胴部下半が膨らむ形態。口縁部外面直下に粘土紐を付加し、鏝状の受け部を造り出している。全面ナデ調整。

国産の施釉陶器には、瀬戸灰釉卸皿（19）・瀬戸灰釉深皿（20）がある。19は口径22.2cm。体部は直線的に開き、口縁部を外方に折り返して内側を肥厚させる。体部上半のみを施釉し、中位以下は露胎。ヘラで卸目を入れている。20は底径14.4cm。内面および体部下半まで施釉されており、内底面はハケ塗りしている。

SD80出土土器（図19-24～28） 土師器（皿）、瓦器（鍋・火鉢）、焼締陶器（甕）がある。

土師器皿には皿Nと皿Sh（24）、皿S（25）がある。皿Nは口径8cm前後の粗製小皿。胎土は赤褐色を呈する。皿Sh（24）は口径8.8cm、器高1.6cm。口縁端部の内側には内傾する端面をもち、端面はごく浅く凹む。皿S（25）は口径13.0cm、器高約2cm。口縁端部の内側に内傾面をもつ。

瓦器には鍋（26）と火鉢（27・28）がある。鍋（26）は体部が大きく外傾して広がり、口縁部の蓋受けは潰れて矮小化している。27は体部と口縁部が直線的に立ち上がる火鉢である。口縁部の外面に指頭による刻み目凸帯を2条巡らす。外面ミガキ調整。28は体部が内湾する火鉢もしくは風炉である。口縁端部を内側に引き出し、幅のある平坦な面をつくっている。口縁部の外面に貼り付け凸帯を2条巡らす。外面ミガキ調整。

焼締陶器は甕の体部片が出土している。

SD88出土土器（図19-29～36） 土師器（皿）、瓦器（鍋）、輸入陶磁器（青磁椀）がある。

土師器皿には皿Nr（29・30）、皿Sb（31・32）、皿S（33）がある。皿Nrには法量に大小がある。29は口径5.4cm、器高0.9cm。外面にユビオサエ痕が顕著に残る。30は口径5.4cm、器高0.9cm。薄手のつくりで、体部は底部から角をもって立ち上がる。皿Sbには平底のもの（32）と、底部がわずかに丸みを帯びるもの（31）がある。32は口径9.3cm、器高1.8cm。体部は平底から角をもち気味に立ち上がる。下半のオサエによりわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめている。31は口径8.7cm、

器高1.9cm。体部はやや丸みを帯びた底部から少し角をもち気味に立ち上がる。下半のオサエにより体部は外反しており、口縁端部の内面にごく浅く凹む内傾面をもつ。口縁部にはタールが付着する。皿S (33) は口径11.9cm、器高1.9cm。平底の底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反している。口縁端部の内面に、ごく浅く凹む内傾面をもち、端部を尖り気味に処理する。

瓦器は鍋 (35・36) がある。口径29.4cm。体部外面はユビオサエ痕を残し、内面にナデ調整を施す。底部から体部への境界は、わずかに稜をもつが不明瞭である。体部は強く外傾し、口縁部の蓋受けは沈線が巡るのみで痕跡化している。

輸入陶磁器には龍泉窯系の青磁椀 (34) がある。口径17.8cm。内面に片切り彫による文様が描かれる。

SD78下層出土土器 (図19-37~50、図版6) 土師器 (皿)、瓦器 (羽釜)、焼締陶器 (播鉢・壺・甕)、輸入陶磁器 (青白磁合子・青磁酒会壺・白磁皿・白磁椀) がある。

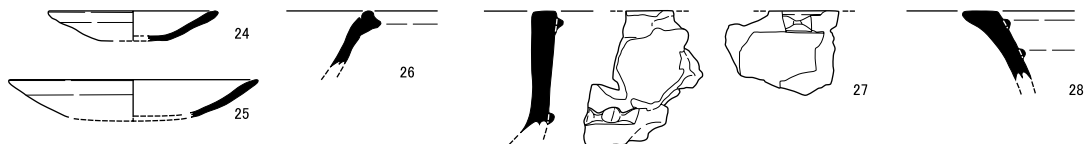
土師器皿には皿Nr (37)、皿N (38)、皿S (39~42) がある。皿Nr (37) は口径7.0cm、器高1.5cm。底部から体部が丸く立ち上がり、すぐに口縁端部となる。外面は指のオサエ痕を残し、内面はナデ調整を施す。皿N (38) は口径10.7cm。赤色系の胎土である。口縁外部は強いヨコナデにより浅く凹み、口縁端部を丸くおさめている。皿S (39) は口径11.0cm、器高2.5cm。口縁外部は強いヨコナデにより浅く凹み、口縁端部の内側にわずかな内傾面を有する。40は口径12.9cm、器高2.3cm。底部からゆるやかに立ち上がる体部をもち、口縁端部の内側には非常に浅い凹みがある端面を有する。41は口径12.8cm、器高1.7cm。体部はやや丸みをもって開き、口縁端部の先端上方が小さく肥厚する。42は口径13.9cm、底径2.2cm。体部はやや角を持って立ち上がり、口縁端部の内側に内傾する端面を有する。

瓦器は羽釜 (47・50) を図化した。羽釜 (47) は口径29.0cm。口縁部はやや外反し、端部を面取りすることで断面は方形となる。外面に鏝をもつ。内面はハケメ調整。50は羽釜の脚部である。断面は円形を呈する。

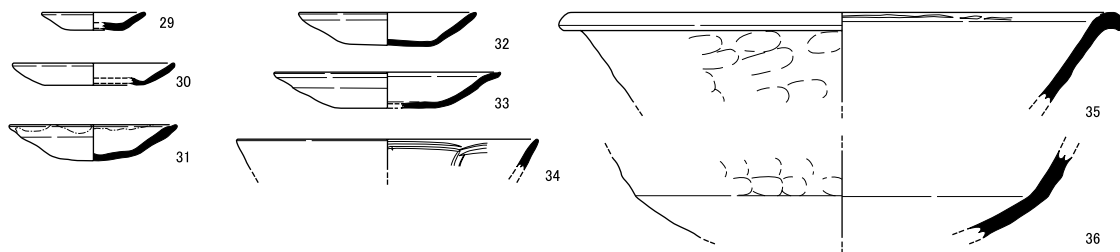
焼締陶器は壺 (48)、甕 (49) を図化した。49は備前産の甕の頸部である。胎土は灰黄褐色を呈し、外面には褐灰色の自然釉が付着する。48は備前産の小型の壺の底部である。底径14.8cm。胎土は褐灰色を呈し、外面は赤褐色に焼成されている。一部外面にススが付着するが、土器断面にもススが認められることから、破片時に二次的な被熱をうけたと考えられる。

輸入陶磁器は青白磁合子 (45)、青磁酒会壺 (46)、白磁皿 (43)・椀 (44) を図化した。45は印籠構造の青白磁合子の蓋である。口径8.0cm、器高1.9cm。型抜きで菊花形に成形しており、蓋表に印花草花文を表す。口縁端部外面は施釉後に軽いケズリを施すため露胎している。46は龍泉窯産の青磁酒会壺の胴裾部片である。外面に鎬文。底のない体部を作り、鉢形の粘土板を底部として内側に落とし込み、釉薬をかけ焼成することによって底部となる粘土板を融着させている。43は白磁の皿か。底径6.0cm。内外面ともに施釉されている。44は白磁椀の底部である。底径3.9cm。削り出し高台。胎土はやや粗く、体部下3分の1が露胎する。底部外面には朱と黒の墨による「卍」の墨書がある。

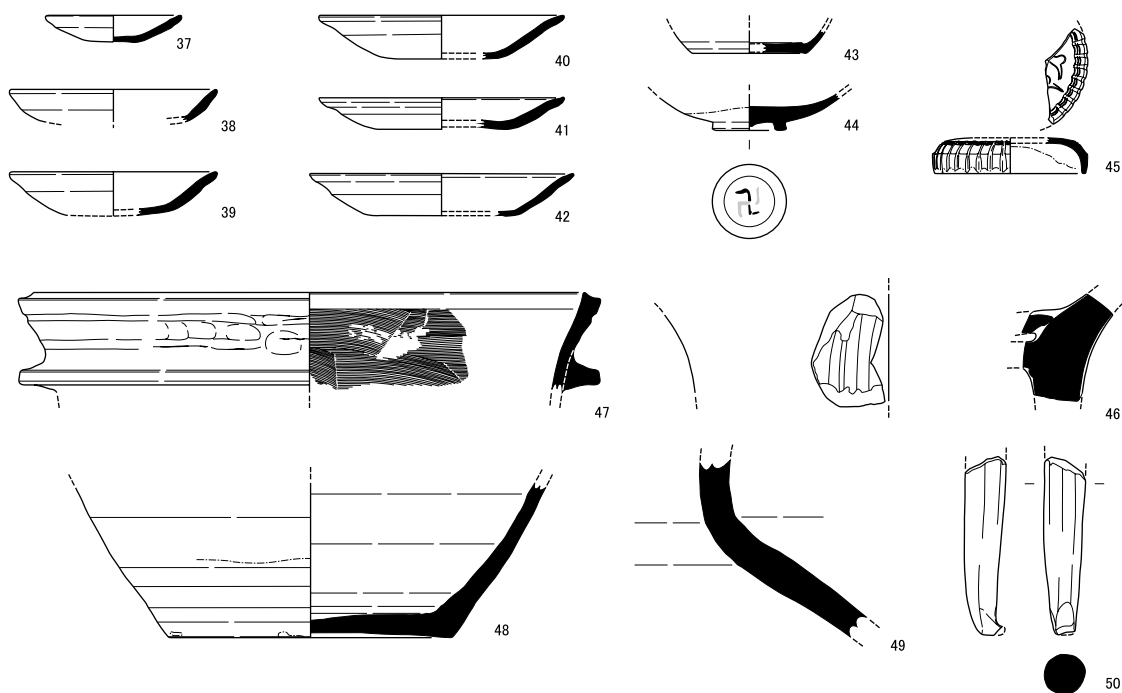
SD80



SD88



SD78下層



SD78上層

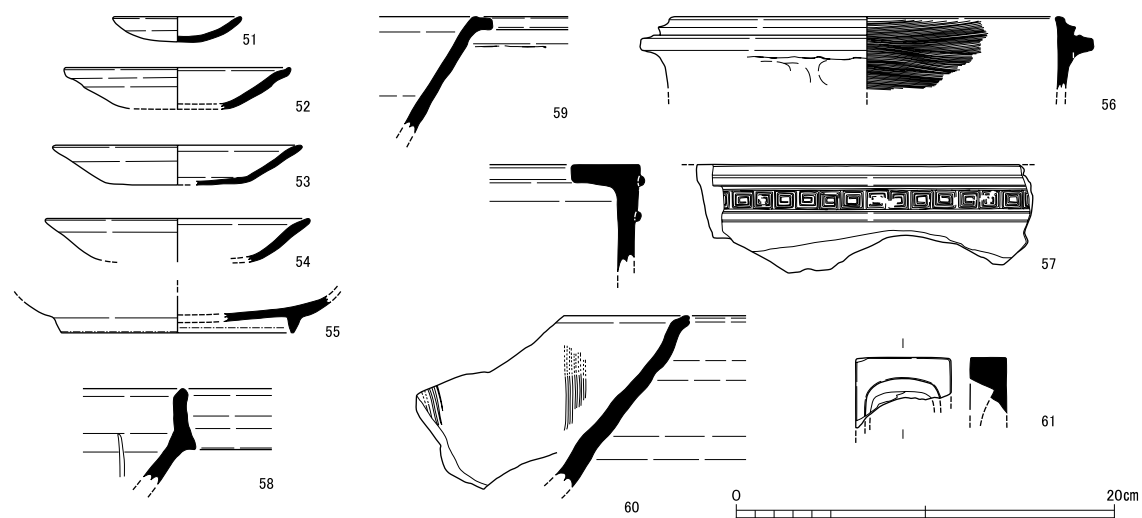


图19 遺物実測図2 (1:4)

(5) 安土桃山時代から江戸時代前期の遺物

SD78上層出土土器・土製品(図19-51~61、図版6) 土師器(皿)、瓦器(羽釜・鍋・火鉢)、施釉陶器(瀬戸)、焼締陶器(播鉢・甕)、輸入陶磁器(青磁・白磁皿)、土製品(陶硯)がある。

土師器皿は皿Nr(51)と皿S(52~54)を図化した。皿Nr(51)は口径6.7cm、器高1.4cm。底から体部が丸くたちあがり、口縁端部をヨコナデで丸くおさめる。皿Sには、53のように口縁端部の内傾面が弱く、やや平底気味の底部から角を持ち気味で立ち上がり、内面立ち上がり部に凹線状圏線をもつものと、52・54のように口縁端部の内側に内傾する端面をもつものがある。52は口径12.0cm、器高2.2cm、53は口径13.0cm、器高2.1cm、54は口径13.8cm、器高2.3cm。

瓦器は羽釜(56)、火鉢(57)を図化した。羽釜(56)は口径20.8cm。口縁内端部が発達し、外面直下に鏝を付ける。体部はやや直立気味で、内面にハケメ調整を施す。火鉢(57)は平面方形もしくは長方形。口縁端部を内側に引き出し、幅のある平坦な面をつくっている。外面に2条の貼り付け突帯をめぐらし、間に雷文のスタンプを押捺している。

焼締陶器は播鉢(58~60)を図化した。58は備前産の播鉢である。口縁は強く上方に立ち上がり、内外面はロクロによるナデ調整痕を残す。口縁上端部に内傾面、拡張部下端はやや突出し稜をもっている。なお、ここでは図化していないが、58と同じ播鉢と考えられる片口の破片も出土している。59・60は信楽産の播鉢である。胎土は橙色。内面の摩耗が激しいため限定し難いが、播目は5~6条をひとつの単位としている。

輸入陶磁器は白磁皿(55)の底部である。底径12.2cm。削り出し高台で断面三角形状となる。

土製品は陶硯(61)がある。墨池側の破片が出土した。内外面を研磨しただけの簡素なつくりで、平面長方形を呈する。

SK74出土土器(図20-62~76、図版7) 土師器(皿)、瓦器(羽釜)、施釉陶器(美濃丸皿・美濃天目椀)、焼締陶器(播鉢・甕)、輸入陶磁器(白磁皿)がある。

土師器皿には皿Nr(62・63)と皿Sb(64~66)、皿S(67~69)がある。皿Nr(62)は口径5.5cm、器高1.3cm。内面に一方向のヨコナデを施す。63は口径5.9cm、器高1.2cm。体部下半のオサエにより口縁部が外に軽く肥厚し、底部外面を押し上げて、凹みを作り出している。皿Sbは立ち上がりの角が不明瞭となり、底部から体部にかけて丸みを帯びるもので、口径8~9cm、器高2cm前後のものが主体となる。64は口径8.3cm、器高2.4cm。白褐色系の胎土をもつ。他よりもやや器高が深く、形態の丸みが強い。内面ナデ調整。底部外面は軽く押し上げられ、弱い凹みをもつ。65は口径8.8cm、器高2.0cm。赤褐色系の胎土をもつ。内面にナデ調整を施し、口縁端部内面に、不明瞭ではあるが、内傾する端面をもつ。66は口径9.0cm、器高1.8cm。白褐色系の胎土をもつ。体部下半のオサエにより、わずかに外反する。内面ナデ調整。口縁部にタールが付着する。燈明皿か。皿Sは体部が直線状にひらき、見込みに凹線状圏線をもつものが主体である。胎土は淡橙色系。67は口径10.4cm、器高2.2cm。口縁端部を丸く処理する。内面はナデ調整。回しナデの終端部分には、ひき抜いた痕跡が残る。68は口径12.5cm、器高2.1cm。口縁端部を丸く処理する。69は口径14.7cm、器高

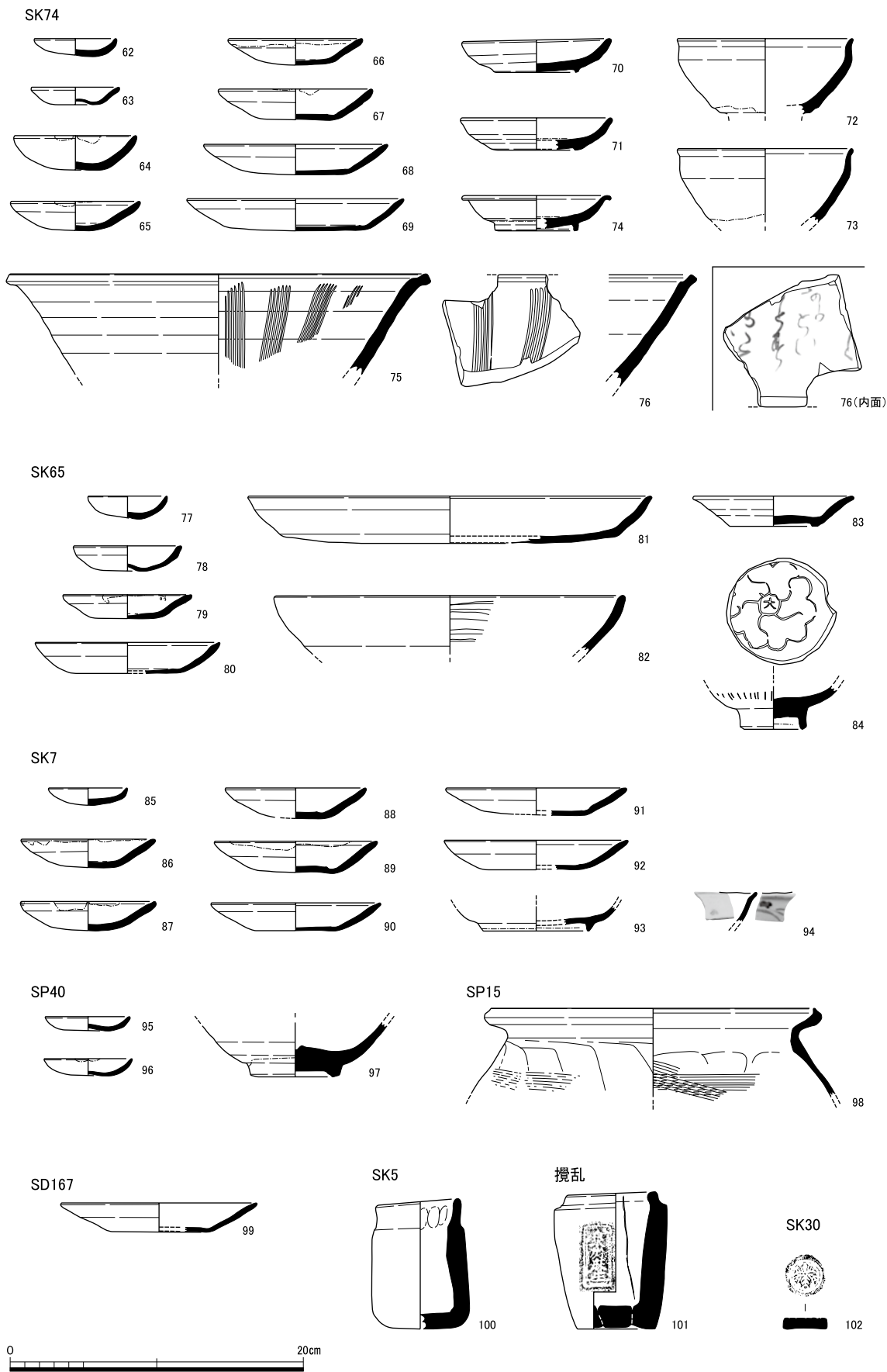


图20 遺物実測図3 (1:4)



□は判読困難

□ □
 □ と と □
 い □
 □ □

図21 SK74出土墨書土器

2.2cm。口縁端部内面に、不明瞭な内傾面をもつ。

国産の施釉陶器には、美濃大窯の製品と思われる丸皿・天目椀がある。70は灰釉の丸皿である。口径10.0cm、底径5.4cm、器高2.3cm。黄緑色の灰釉は一部分が白濁化している。削り出し高台。体部外面下半から底部にかけて一部露胎しており、底部外面には輪トチン痕が残る。71は灰釉の丸皿である。口径10.1cm、底径5.2cm、器高2.2cm。削り出し高台。内面の見込み部分が釉剥ぎし、底部外面には輪トチン痕が残る。72は鉄釉の天目椀である。口径11.9cm。体部末端から底部にかけて錆釉による化粧掛けを施す。体部は直線的で、口縁部下方で折れて立ち上がり、口縁端部を外に折り返す。73は天目椀である。口径11.8cm。光沢のある鉄釉を施す。

焼締陶器には播鉢と甕の体部片がある。ここでは播鉢(75・76)を図化した。75は信楽産の播鉢である。口径28.4cm。胎土は橙色を呈し、3mm以下の長石や石英を含む。播目は6条を一単位。76は信楽産の播鉢片である。胎土は橙色を呈する。播目は6条一単位。内面にひらがなで墨書がある(図21)。

輸入陶磁器には白磁の端反り皿(74)がある。口径9.6cm、底径5.2cm、器高2.4cm。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部が外へ巻き込むように外反する。削り出し高台。見込みの釉を蛇の目状に掻き取っており、底部外面は露胎している。

SK65出土土器(図20-77~84、図版7) 土師器(皿)、瓦器(鉢・焙烙)、施釉陶器(瀬戸小皿)、輸入陶磁器(青磁椀)がある。

土師器皿には皿Nr(77・78)、皿Sb(79)、皿S(80)がある。皿Nrは法量に大小があり、いずれも底部外面を押し上げて、凹みを作り出している。77は口径5.3cm、器高1.6cm。底部から体部が丸く立ち上がり、すぐ口縁端部となる。78は口径7.3cm、器高1.7cm。体部下半がオサエによって外反する。調整は内面全体を一度に一定方向にナデる。皿Sb(79)は口径8.7cm、器高1.6cm。体部下

半のオサエにより、わずかに外反する。口縁端部の内面に浅い凹線のある端面をもつ。口縁部にタール付着。皿S(80)は口径12.5cm、器高2.1cm。底部から体部がゆるやかに立ち上がり、見込みに凹線状圏線をもつ。口縁端部の内面には内傾する端面が認められる。

瓦器は焙烙(81)と鉢(82)がある。焙烙(81)は口径27.4cm、器高3.2cm。体部は底部から角をもって直線的に立ち上がる。内外面ナデ調整。外面にスス、内面にコゲが付着する。鉢(82)は口径23.6cm。内面に横方向のミガキ調整を施す。

国産の施釉陶器は美濃大窯の製品と思われる鉄釉小皿(83)がある。口径27.4cm、器高3.2cm。鉄釉が塗り残された底部外面に錆釉が認められる。体部は直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。削り出し高台。底部内面に三叉トチン痕、外面に輪トチン痕を残す。

輸入陶磁器は龍泉窯系の青磁椀(84)がある。底径4.0cm。内底面に劃花文を描き、花序に「大」の文字を刻む。削り出し高台。高台内は露胎している。

SP7出土土器(図20-85~94、図版7) 土師器(皿)、輸入陶磁器(白磁皿・染付椀)が出土している。後二者は小片であり、混入の可能性が高い。

土師器皿は皿Nr(85)、皿Sb(86・87)、皿S(88~92)がある。皿Nr(85)は口径5.4cm、器高1.2cm。底部から体部が立ち上がり、すぐ口縁部を形成する。口縁部にタールが付着している。皿Sbは、体部の立ち上がりが不明瞭で、体部から底部が丸みをもつもの(いわゆる「丸底小皿」)である。見込みに圏線をもたない。86は口径9.1cm、器高2.0cm。口縁端部を丸く処理する。口縁部にタールが付着している。87は口径9.1cm、器高2.0cm。口縁部の内側に弱い内傾面をもち、端部が上方にやや肥厚している。口縁部にタール付着。皿Sは法量差をもち、9cm台・11cm台・12cm台の三者がある。いずれの個体も、体部は平らな底部からもわずかに角をもって立ち上がり、見込みに凹線状圏線をもつ。皿S(88)は口径9.5cm、器高2.1cm。口縁部の内側に弱い内傾面をもつ。皿S(89)は口径11.0cm、器高2.2cm。口縁部はやや外反気味で、内側に浅い凹線を伴う弱い内傾面をもつ。タール付着。皿S(90)は口径11.5cm、器高1.9cm。体部は短く直線的に開き、口縁部の内側に弱い内傾面をもつ。皿S(91)は口径12.3cm、器高1.9cm。口縁部内面の内傾面は不明瞭で、端部を尖り気味に処理する。皿S(92)は口径12.5cm、器高2.0cm。口縁部の内側に弱い内傾面をもつ。口縁部にタール付着。

輸入陶磁器は白磁の皿と染付の椀がある。白磁皿(93)は底径7.2cm。高台を断面三角形に削り出している。全面に施釉され、高台の接地面のみが露胎する。94は染付椀の口縁部片である。口縁端部は外反し、指で摘み上げて輪花にしている。

SP40出土土器(図20-95~97) 土師器(皿)、輸入陶磁器(青磁椀)がある。

土師器皿は皿Nr(95・96)がある。いずれも底部から体部が丸く立ち上がり、すぐ口縁端部となる。また底部外面は軽く押し上げられ、底面に弱い凹みをもつ。95は口径5.8cm、器高1.0cm。96は口径6.0cm、器高1.2cm。内面全体を一定方向にナデ調整している。口縁部にタール付着。

輸入陶磁器には青磁椀(97)がある。底径6.0cm。胎土は赤褐色を呈する。釉はやや白濁した鈍い青色で、底部が露胎している。削り出し高台。

SP15出土土器（図20-98） 土師器の大和型鍋（98）がある。口径21.9cm。口縁部を「く」字状に折り曲げて、上端を摘み上げながらナデ調整を施すことで跳ね上げ口縁形に造作している。胎土は黄橙色で堅緻に焼きあがる。調整はナデを基本としており、頸部内面はヘラ状工具による面取り気味のナデ調整を施し、胴部内面にハケメが残る。

SD167出土土器（図20-99） 土師器皿の皿S（99）がある。口径13.3cm、器高2.0cm。内面の立ち上がり部に凹線状圏線をもつ。体部は直線的に開き、口縁端部を丸く処理している。

SK5出土遺物（図20-100） 100は焼塩壺である。口径5.6cm、器高8.9cm。外面ナデ調整。内面は指によるナデで成形しており、指あたりが無い底部や体部上半に布目を残す。筒状の体部をもち、口縁部はオサエとナデで器壁の厚みを減している。

攪乱出土遺物（図20-101） 101は焼塩壺である。口径5.9cm、底径5.3cm、器高9.4cm。外面ナデ調整。内面は全体に布目を残す。逆裁頭円錐状の体部をもち、口縁部に蓋受けを作り出す。底部には粘土栓を内側から詰めている。江戸時代中期。

SK30出土遺物（図20-102） 102は泥面子（土面子）。径3.2cm。型押しによる図柄は大根か。

註

20) 遺物編年や年代観は次の文献に依拠した。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

平尾政幸・山口 真『平安京左京四條二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年

5. まとめ

今回の調査によって、調査例が少ない上京遺跡でも、特に発掘成果が希薄な地点の考古資料を得ることができた。室町時代から急速に進展した上京周辺の都市化の状況を、文献や絵図資料からだけでなく、考古学的なデータをふまえて具体的に考察する手がかりを得たことは大きな成果と考える。以下、今回の調査成果をまとめる。

(1) 遺構の変遷 (図22)

平安時代後期から室町時代中期以前(11世紀中葉から15世紀前葉) 調査区東半で確認した、底に小穴をもつ土坑群を特徴とする。出土遺物が僅少で性格はよくわからないが、他の遺跡の類例から甕などの貯蔵具を据え付ける施設を想定した。その場合は土倉・酒屋のような施設が調査地に存在した可能性が考えられる。散発的ながら平安時代後期以降の遺物が出土しており、平安京北辺の発展期と合致する。また武者小路の設置時期もこの時期に遡る可能性がある。

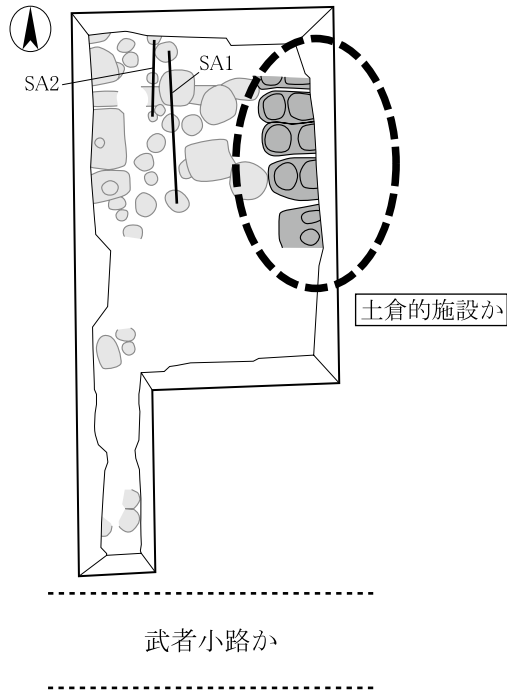
室町時代中期から後期(15世紀中葉から16世紀中葉) 調査区南側の現武者小路通に面した箇所東西方向の区画溝を敷設し、それよりも北側に小穴や土坑が分布する遺構配置を確認した。区画溝は道路側溝と宅地内溝と推察する。側溝と内溝の間には塀などの構造物が存在した可能性がある。街路と屋地を物理的に画する非接道的な空間構成から、屋敷地的な土地利用が考えられる。²¹⁾

また室町時代後期の一時期に、それまでの区画溝よりも規模の大きな溝(堀)が屋敷地の南側に掘削される。溝の埋土からは主に16世紀前葉から中葉にかけての遺物が出土した。その中でも特に注目される遺物として、大型の龍泉窯産の青磁(酒会壺)片を挙げるができる。同様の製品は、京都府内では山科本願寺から出土している。²²⁾これは国内でも出土例が稀な奢侈品である。同じく出土した底部に「卍」を墨書した白磁碗と併せて、調査地周辺の性格を考える上で重要な遺物と考える。

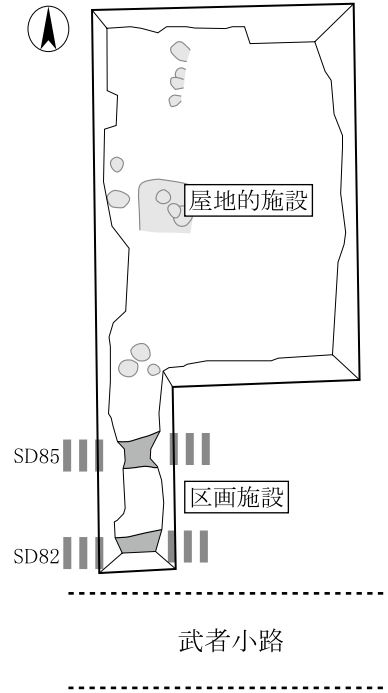
安土桃山時代から江戸時代前期(16世紀後葉から17世紀前葉) 武者小路の道路側溝及び土間状遺構・柵列などを確認した。土間状遺構は道路側溝に面する。土間状遺構・柵列は現在の地割と同様に、南北方向を志向した遺構配置をとる。接道的・沿道的な空間構成から、町屋的な土地利用が想定できる。²³⁾

小結 調査区では室町時代以降に遺構・遺物量が増大する。空間構成という点から判断すると、土倉的空間(15世紀前葉以前)→屋敷的空間(15世紀中葉から16世紀中葉)→町屋的空間(16世紀後葉から17世紀前葉)と推移した。以上から、土倉的空間をとる段階(11世紀中葉以降)、屋敷的空間をとる段階(15世紀中葉)、町屋的空間をとる段階(16世紀後葉)に空間構成上の画期が認められる。また、調査地が屋敷的空間をとる段階の16世紀中葉に堀が掘削されることも、重要な変化である。

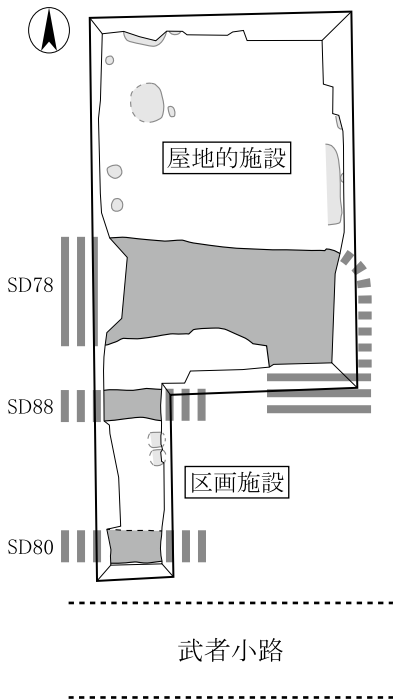
【平安時代後期から室町時代前期】



【室町時代中期】



【室町時代後期】



【安土桃山時代から江戸時代前期】

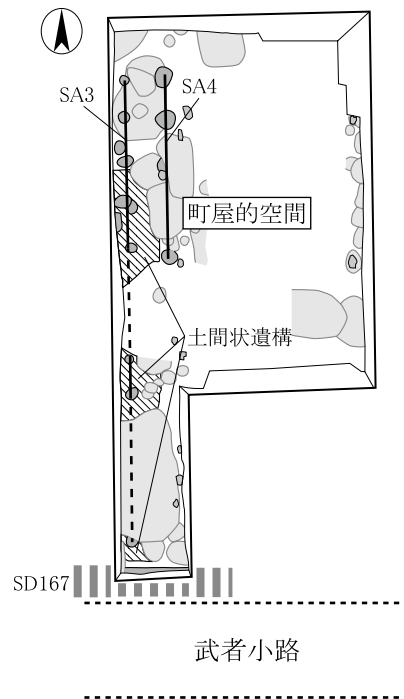


図22 遺構変遷模式図 (1 : 200)

(2) 中世後期の屋敷的空間構成について

今回の調査によって、本調査区における遺構の変遷には3つの段階があることが判明した。ここでは絵図などの史料が多い、室町時代中期から後期（15世紀中葉から16世紀中葉）の屋敷地的な土地利用の性格について、先行研究をふまえた整理を行う。

「第2章 位置と環境」で述べたように、調査地が位置する現西無車小路町の北半には、『洛中洛外図』では「ときわいん」（旧町田本）、「常盤井殿」（上杉本）という邸宅が描かれている。描かれた邸宅は入母屋造檜皮葺屋根の建物1棟と板葺屋根の1棟であり、腰屋根石置板葺の築地塀が屋地と街路を画す。この邸宅が亀山院皇子恒明親王にはじまる宮家「常盤井宮」の邸宅を描いたものであり、少なくとも16世紀中葉ころ、当時の人々にはこの地が常盤井殿として認識されていたことは既に記した。

『洛中洛外図』は応仁の乱後（旧町田本：16世紀前葉、上杉本：16世紀中葉）の街並みの様子をかなり正確に描いたものとされている。常盤井殿が描かれた16世紀前葉から中葉は、今回の調査地において屋敷地的な土地利用をとる時期と符合しており、今回の調査が常盤井宮の邸宅の一端を確認した可能性がある。

しかし、『洛中洛外図』は客観的な地図機能を具現化したものではなく、あくまでも京郊の名所旧蹟をきらびやかに配した調度品として製作されたものであって、画家の主観による題材の変形や誇張、省略化があったことは先学が指摘するとおりである²⁵⁾。実際、「常盤井殿」をはじめ、『洛中洛外図』で描かれた多くの邸宅には築地の表現はあるものの、今回検出したような、敷地を取り囲む堀や溝の表現があるものは少ない。今回の調査で確認できた「区画施設」は、親王家が居住する屋敷地に通有の施設といえるのだろうか。

室町時代中期から後期の堀や塀で区画された屋敷地の調査例としては、平安京左京北辺四坊八町の調査事例を挙げることができる。敷地の規模は東西30m×南北60mを測る。街路沿いには区画溝（堀）が掘削され、堀から1m内側には布掘掘形の塀²⁶⁾を敷設している。公家・武家の邸宅として推定されている。

また文献史料からの復元ではあるが、常盤井殿の東側、現新町通をはさんだ場所にあったとされる三条西実隆の邸宅は、街路沿いに堀を穿ち、その内側に築地や釘貫を敷設しただけでなく、築地の内側にさらに堀が巡ると想定されている²⁷⁾。

三条西邸の区画施設のうち釘貫は、文明から明応（15世紀後葉から16世紀初頭）頃の世情不穏、直接的には徳政一揆や盗賊、放火に対処するために敷設されたものであり、築造当初から備え付けられた施設ではない。だが、少ない事例からではあるが、例として挙げた室町時代中期から後期にかけての屋敷地両者から判断する限り、屋地を取り囲む区画施設として外堀や溝が備えられており、その内側にも塀や堀などを状況に応じていくつか敷設した可能性があると考えられる。

今回の調査では築地塀の痕跡を確認できなかったが、外堀とあわせて内堀が併設されている点は、当該期の屋敷地に備えられるような区画施設として評価できるのではなかろうか。

では、今回確認できた屋敷的空間が常盤井宮の邸宅の一画として評価できるのかを、文献等資料を通して検討する。

そもそも常盤井宮家は、龜山院皇子恒明親王にはじまる親王家として、鎌倉時代から室町時代にかけて存在した宮家である。²⁹⁾その居所となる邸宅（常盤井殿）は、文献によると当初は現在の下御霊神社あたりにあったとされる。しかし足利義満の代に中御門万里小路に移され、北小路を経た後、足利義教の代（在位：1428 - 1441）、永享3年（1431）に小河の地に移された。この小河は、以前に足利満詮が居を構えた小川殿小御所周辺、すなわち武者小路小川の地と推定されている。³⁰⁾その後、第六代恒直親王が天文21年（1552）に薨去した後は子孫の名は伝えられておらず、この時をもって常盤井宮家は事実上断絶した。

以上、文献によって明らかになった常盤井殿の顛末に関して、今回の調査成果と関連する部分を抜き出すと、常盤井宮の邸宅は永享3年（1431）に小河の地に移り、その後は邸宅の移動を確認できないまま、天文21年（1552）まで存続したとまとめることができる。

ここで注意したい点は、常盤井殿が武者小路小川に占地したと史料が伝える15世紀中葉から16世紀中葉という時期と、今回の調査区において屋敷地的な土地利用があった時期（15世紀中葉から16世紀中葉）が、ほぼ一致しているという点である。これは調査区が常盤井殿と関わりをもつ可能性を示すものである。決して多くはないが、龍泉窯系青磁の酒会壺など輸入陶磁器の優品などの出土遺物も、この地が常盤井宮のような貴顕とのつながりがあることを示唆するのかもしれない。³¹⁾

とはいえ、街路と屋地を物理的に画する非接道的な空間構成は公家や武家の邸宅に限定されるものではない。³²⁾近世のような身分や職掌による厳格な棲み分けがなされたわけではなく、混住がありえた中世の街区空間の在り方を考えると、ここが常盤井殿であったとする直接的な証拠がない限り、今回の成果だけで結論付けることは難しい。

（3）近世初頭の町屋的空間構成について

16世紀半ばの常盤井宮家の断絶と機を同じくして、調査区では屋敷的空間から町屋的空間へと土地利用の様相が変化する。『洛中洛外図』のように、当時の土地利用の状況を今日に伝える絵図は現在のところ確認できていないが、文献史料からは、その様子を伝える史料がいくつか存在している。

ひとつは、「第2章 位置と環境」で言及した『蝸川家史料雑記』永禄四年三月十一日付半松齋宗養申状と、それに関連する史料である。³³⁾これは連歌師であった半松齋宗養（以下、宗養と記す）が現在知行している田地や屋地について安堵の下知を幕府政所に申請した申状であり、当時の政所代蝸川親俊が控えとして残した文書である。この申状に添付された買得目録事には、宗養が所有する不動産が「西武者小路常盤井殿御地内」にあり、東西七間南北六間半の規模であることが記載されている。

また、これに関連して、常盤井殿御地内の不動産が宗養に渡った経緯が『蝸川家文書』（七五三京都常盤井殿敷地等文書案）から窺うことができる。その内容は、常盤井殿の敷地を一色式部少輔

(晴具)が拝領し、その後、奥坊宗信なる人物が敷地の一部を知行された。しかし、同じ敷地を一色式部少輔が宗養に譲渡したため、奥坊宗信がその敷地の所有権を宗養に譲ったというものである。

もうひとつは『錢主賦引付』(天文一五年十二月七日付永圓寺順學申状)である。これは分一錢納付条件付徳政令に付随して分一錢の納付を確認し、奉書発給を記録した文書の内の一部で、常盤井殿御地のうち永圓寺が所有権を有する部分の権利が徳政令によって破棄された顛末に対する申状である。³⁴⁾

上記の史料からわかることは、常盤井殿の敷地の所有権が16世紀中葉以降に武家や寺社に移り、さらにその一部が別の人物の手に渡ったことである。常盤井殿の敷地がどれほどの規模であったのかは不明であるが、宗養が得たとされる東西七間×南北六間半の敷地は、『洛中洛外図』の表現(方2分の1町以上)から推測する限り、常盤井宮の邸宅のごく一部を占めるものでしかなかったであろう。

このように、史料からは16世紀中葉以降、常盤井殿の敷地が公家や武家などの貴顕以外の人々に渡ることによって分割されていく状況が確認できる。この結果、旧来の街路を基本とした土地利用から街区内部にまで達する高密度の土地利用へという変化の道筋が生まれ、『洛中絵図 寛永後万治前』(京都大学付属図書館蔵)にみえる「ときわいのずし」や「せいくわんじのずし」が成立していくのであろう。

今回の調査区における町屋的空間の成立は、上記のような土地利用の変化を如実に示すものであり、武者小路界限における近世的な都市景観の成立過程を示すものと推察する。

註

- 21) 古代から近世の「京都」の空間的特質を分析した高橋康夫は、町屋の特質が道路に面する建築であり、築垣や板塀などで屋地を道から隔絶する屋敷とは対照的とみなす。また日本の伝統的都市建築を分析した伊藤毅も、町屋を接道性と沿道性をもつ住宅と定義し、敷地の周囲に塀や垣などの境界装置を敷地にめぐらす非接道性・非沿道性の住宅(屋敷型)と対比している。

高橋康夫『京町家・千年のあゆみ 都にいきづく住まいの原型』学芸出版社 2001年

伊藤 毅『町屋と町並み 日本史リブレット35』山川出版社 2007年

- 22) 柏田有香「山科本願寺(4)」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年

- 23) ここでの「まちや」の表記は、伊藤の用法に従い、農家と対比させるための「町家」ではなく、都市における建築と敷地の双方を含意する「町屋」を用いた。

伊藤 毅 註21文献

- 24) 吉崎 伸「まとめ」『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

今谷 明『京都・一五四七年 上杉本洛中洛外図の謎を解く』平凡社 1988年

山田邦和「戦国期京都の復元」『京都都市史の研究』吉川弘文館 2009年

- 25) 山田邦和「中世都市の成立と展開」『京都都市史の研究』吉川弘文館 2009年

- 26) 平方幸雄ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
内田好昭「発掘資料から見た京都における中世後期から近世の町屋」『平安京における居住形態と住宅建築の学際研究 平成15年度～平成16年度科学研究補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書(研究代表 西山良平)』 2005年
- 27) 原 勝郎「東山時代における一縉紳の生活」『藝文』 京都大学文学部 1917年
- 28) 同志社大学新町校地遺跡の調査(⑦)において、室町時代の構(かまえ)とみられる南北溝が確認されている。渡辺悦子は、この南北溝が『後法興院記』明応8年(1498)9月16日条にある「本満寺に詣る。物?(騷)により要害有り。仍(よ)りて門前に輿を立て念誦せしむ。」の要害にあたと指摘している。この年は京中が土一揆などで不穏な空気に包まれており、『後法興院記』同年10月10日条にある室町幕府管領細川政元が鷹司から堀川に至る禁裏守護のための要害の濠を築かせたとする記事は、本満寺が要害を築いたのと同じ動機ではないかと推測している。三条西邸の釘貫も、この動向と軌を一にするものであろう。
渡辺悦子「第20回 文献屋の本満寺探索vol.4」同志社歴史資料館ホームページ 2003年
- 29) 今谷 明「中世の親王家と宮家の創設」『歴史読本』2006年11月号 新人物往来社 2006年
- 30) 松蘭 斉「中世の宮家について-南北朝・室町期を中心に-」『人間文化』第25号 愛知学園大学人間文化研究所 2010年
- 31) 龍泉窯系青磁の酒会壺が山科本願寺で出土していること、「卍」墨書の白磁椀、経塚からの出土が多い青白磁合子など、今回出土した輸入陶磁器の多くが寺社関係の営みと何等かの関係があることは注目される。輸入陶磁器の流通に寺社が果たした役割が大きいことはこれまでも示されているが、それだけでなく常盤井殿の南に存在を想定した寺社仏閣との関連を考慮する必要があるのかもしれない。
- 32) 伊藤 毅 註21文献
- 33) 岩下紀之「連歌師宗養所有の不動産について」『愛知淑徳大学紀要国語国文』第25号 愛知淑徳大学国文学会 2002年
- 34) 桑山浩然校訂「錢主賦引付 天文十五年」『室町幕府引付史料集成』下巻 近藤出版社 1986年

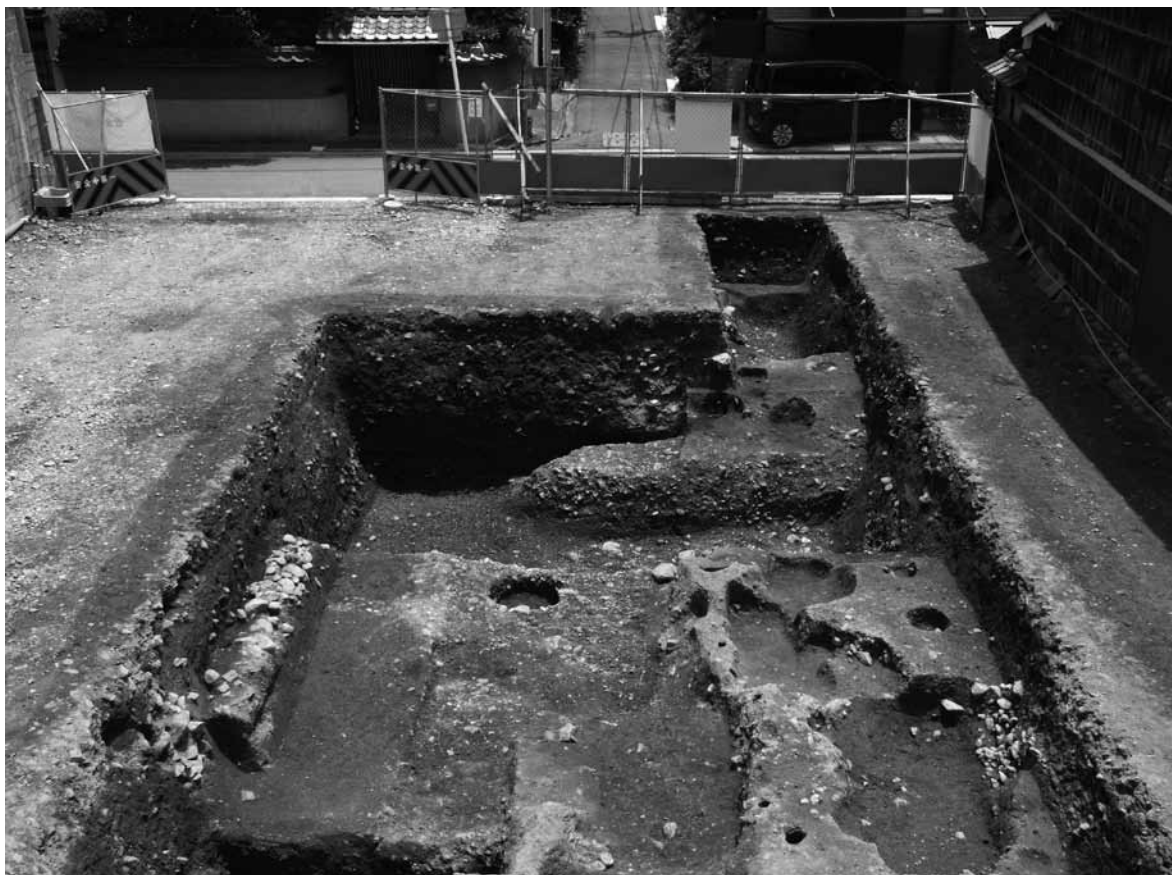
圖 版



1 第1面全景（北から）



2 SP 7 検出状況（西から）



1 第2面全景（北から）



2 SD88完掘状況（北西から）



1 SD78完掘状況（東から）



2 SD78完掘状況（北西から）



1 第3面全景（北から）



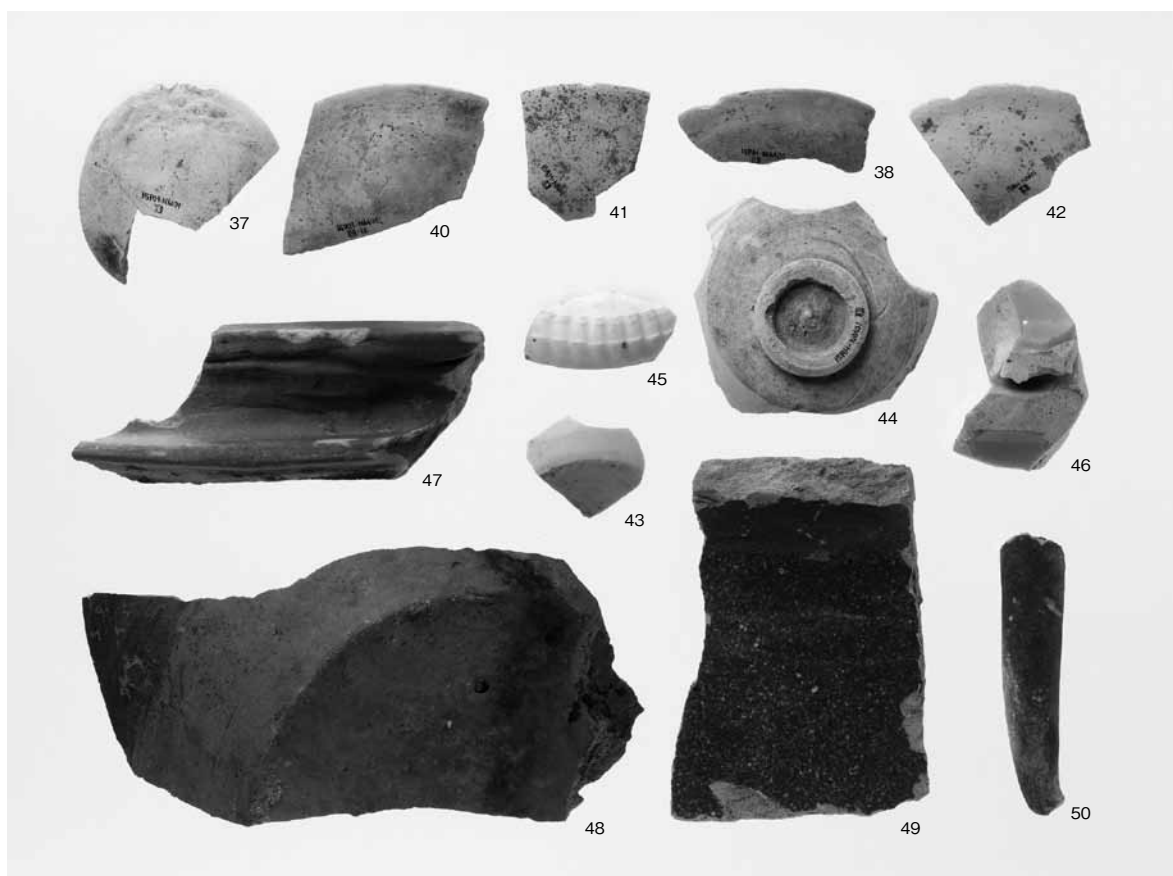
2 SD85完掘状況（北西から）



1 第4面全景（北から）



2 調査区東側土坑群完掘状況（北から）



1 SD78下層出土土器



2 SD78上層出土土器



SK74 · SK65 · SP7 出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	かみぎょういせき							
書名	上京遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-4							
編著者名	中谷正和							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2015年10月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみぎょういせき 上京遺跡	きょうとし 京都市上京区 武者小路通小 川東入西無車 小路町599、 600-1ほか	26100	224	35度 01分 40秒	135度 45分 20秒	2016年6月 15日～2015 年7月16日	79.6㎡	共同住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上京遺跡	都城跡	室町時代中期 以前	土坑群、小穴列	土師器、須恵器、白色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、瓦器、施釉陶器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦				
		室町時代中期	溝、土坑	土師器、瓦器、施釉陶 器、須恵質陶器、焼締 陶器、輸入陶磁器、瓦				
		室町時代後期	溝、堀、小穴、土 坑、土器集積	土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、輸入陶 磁器、瓦				
		安土桃山時代 ～江戸時代前期	溝、小穴列、小穴、 土坑、土間状遺構	土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、輸入陶 磁器、土製品、瓦、金 属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-4

上 京 遺 跡

発行日 2015年10月30日

編 集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961